八神太一のリリカルウォー

月乃杜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
八神太一のリリカルウォー

【Ｎコード】
Ｎ９８６９Ｏ

【作者名】
月乃杜

【あらすじ】
１９９９年の冒険から凡そ１００年が経った。
嘗ての仲間達が、相次いで寿命を迎える中で最後まで生き残った八神太一。
昔を振り返りながら、太一は満足そうに逝った。
しかし太一は生前の功績から、記憶を保ったまま転生をする事に……

太一が転生をした先は【魔法少女リリカルなのは】の世界だった。

第０話：大往生（前書き）

八神太一のリリカルな冒険（物語）が始まります。

第０話：大往生

.

其処には１人の老人が住んでいた。

皺だらけの身体に、しかし今にも逝きそうな老人にしては目の輝きは確かだ。

そんな老人に付き従う様に縁側に座っているのは、黄色い二足歩行に円らな瞳のトカゲ擬き。

老人はトカゲ擬きに話し掛ける。

「なあ、アグモン……」

「なあに？　太一」

【Ｄｉｇｉｍｏｎ　Ａｎａｌｙｚｅｒ】
アグモン
属性：ワクチン種
世代：成長期
種族：爬虫類型
成長して二足歩行が出来る様になった小型の恐竜みたいな姿をした爬虫類型デジモン。獰猛な性格をしていて、爪と牙を持つ。必殺技は【ベビーフレイム】

首を傾げるアグモンに太一と呼ばれた老人は、ポケットから水色をベースとした機械を取り出して語った。

「もう、あの頃の仲間達もみんな逝っちまった。残ってるのは俺だけだな」

「そうだね……」

「ヤマト、タケル、丈、空にミミちゃん、光志郎……それにヒカリ。大輔、京、伊織、賢」

それは懐かしくも輝かしかった小学生時代と中学生時代、選ばれし子供としての使命に翻弄されながらも、デジタルワールドに関わったあの日々。

大変だったが、同時に楽しくもあったと言える。

太一は天を仰ぎ、目を細めながら蒼穹を眩しそうに眺めていた。

昔を追想しているのだろうと、アグモンは黙って太一を見つめ続ける。

「アグモン、俺もそろそろあいつらの所へ逝くよ」

「そうなの？」

「ああ。俺ももう１３０歳になったし、いい加減召されるだろうさ」

「太一……」

2人（1人と一匹？）は縁側に共に座り、のんびりと寛ぎながら揺ったりと話す。

「なあ、アグモン……」

「なあに？　太一」

「楽しかったなぁ……」

「楽しかったねぇ」

本当に揺ったりと……

もうすぐこの時間も終わるのだと、拙速を拒むかの様に只緩やかに。

「空には振られちまったけど、それでも妻を持って、子供が出来て、孫を抱いて……曾孫も見れたし。
曾孫も結婚して、また子供が産まれて、未来は連綿と繋がっていく。
結構、充実してたよなぁ」

「そうだね……」

しかし若干、顔を顰めると苦々しく……

「デジモンを利用しようと暗躍する裏組織なんぞが無ければ、もっと良かったんだがな」

デジモンの軍事利用を考える人間は多く居た。

自ら正義を謳い、デジモンこそは自らの正義を象徴するなどと嘯く者達。

初期の選ばれし子供達が、そんな莫迦な組織を殲滅してきたものだった。

夢を追いながら、二足の草鞋を履いていたのだ。

だけどそれももう終わり。

組織は全て壊滅。

後の事は、遺された者達の冒険（物語）だ。

「なあ、アグモン……」

「なあに？　太一」

「“最後に”見たいな。
格好良い姿、魅せてくれよアグモン……」

「うん、太一！」

太一は手にした機械を……デジヴァイスを真っ直ぐ前に、力強く翳す。

「アグモン、進化だっ！」

デジヴァイスが暁色に変わり、モニターから光が洪水の様に溢れ出した。

「アグモン、ワープ進化ぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！」

ワープ進化の言葉通りに、アグモンの進化形である姿【グレイモン】【メタルグレイモン】を通り越して、究極の姿を現した。

「ウォーグレイモン！」

【Ｄｉｇｉｍｏｎ　Ａｎａｌｙｚｅｒ】
ウォーグレイモン
属性：ワクチン種
世代：究極体
種族：竜人型
アグモンの究極形。
勇者としての使命に目覚めた者が進化すると云われている竜人型デジモン。
必殺技は周囲からエネルギーを収束して放つ【ガイアフォース】

超金属クロンデジゾイドに身を包み、両腕にはドラモン系デジモンに絶大な力を発揮するドラモンキラーを装備しているウォーグレイモンへ進化したアグモン。

「ああ、やっぱり格好良いなぁ……アグモン。
ウォーグレイモンは……」

その笑顔はとても穏やかで優しげで、とても嬉しそうだった。

「ねぇ、太一……太一？
そっか……もう、寝ちゃったんだね。ほら……そのまま寝たら風邪引いちゃうよ？」

近くに置いてあった毛布を太一に賭けてやりながら、大粒の涙を瞳から流し続けるウォーグレイモン。

２１１８年　６月４日……

八神太一がこの日、静かに息を引き取った。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

其処は何も無い空間。

暗く、静かな虚無の空間。

そんな空間にアグモンは浮かんでいる。

「此処、何処？」

アグモンはキョロキョロと空間を見渡した。

太一を見送って、それからデジヴァイスを拾ったら光が溢れ、気が付けばこんな所に居たのだ。

訳が解らなかった。

意味が判らなかった。
いったい何故？
アグモンは手を顎に添え、首を傾げるしかない。
『よく来たなアグモン』
「誰？　何処に居るの？」
『落ち着けよ、アグモン』
「！？　その声、太一？
太一なの？」
その声は、アグモンが尤も大切だと思う人間、太一の声によく似ていた。
『残念だけど違う。声は……中の人が同じなだけだ』
「中の人？」
『気にするな。話を続けるぞ？　アグモン』
アグモンは頷くと、黙って聞く事にする。
『八神太一の元に行きたいか？』
「行きたい！」

即答した。

『八神太一は生前、素晴らしい功績を残した。
故に、記憶を残したままに転生をさせる事としたが、転生に際して力を与えると言ったが、どんなチートな能力得るよりも只アグモンとまた一緒にと願った』

ソレを聞いて、アグモンは涙を知らず知らずの内に流してしまう。

「太一……」

『しかし、残念ながら行く先の世界は基本的にデジモンが存在しない。そこで、今君が持つデジヴァイスに君を融合させる』

「デジヴァイスに？」

『デジモンは元々がデータだ。データとは情報。情報は情報と一つになる。
そして進歩するんだ』

「一つに……合体して進歩する？　ジョグレス……？　進化……っ！！」

何処かから気配が頷く様な……そんな感覚が伝わる。

『別のデジタルワールドに在るデジヴァイス、その姿に変化させよう。そして、彼が望む時君の魂（スピリット）と一つになって、彼は進化するだろう』

「太一が僕と……一つに」

アグモンは想像して、何だか嬉しくなる。

『アグモン、君に問う。
デジモンである事を捨て、八神太一と共に在る事を真実望むか否か？』

「僕の全ては太一と共に、太一は僕の最高のパートナーだから！」

応えた瞬間、デジヴァイスが光輝くと形を大きく変化させた。

Ｄ－スキャナー。

黒と橙色で彩られた掌サイズのデバイス。

『八神太一には最小限の事しか話していない。彼が、真に力を必要として望んだ時、君の意識は目覚める。
さぁ今、新たな冒険（物語）が進化する！』

そして、冒険の扉は開く。

彼が生まれ変わった世界、それは……

【魔法少女リリカルなのは】の世界。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

転生した太一が生前の記憶を取り戻したのは、４歳の頃の事だ。

両親を事故で失い、父方の親戚の家に養子として入った日。

丁度、６月４日の誕生日を迎えた日だった。

新しい両親、そして“新しい妹”が出来た日であり、父親の形見として見付けた見た事のない機械を、その手にした日。

自分が“八神太一”である事を自覚したのだ。

新しい両親はとても暖かくて、二つ年下で同じ誕生日の義妹が可愛くて……

その日彼は……【八神太一】として新生したその日、泣いたのだった。

.

第０話：大往生（後書き）

序章終了。
次回、本編開始です。

第1話：太一新生（前書き）

何とか書けました。

早速感想を頂き、有難うございます。

それでは、お楽しみ頂ければ幸いです。

第1話：太一新生

・

アグモンがウォーグレイモンに進化した姿を見た太一は、そのままゆっくりと息を引き取った。

気が付くと、太一は小学生の頃と同じ姿で深淵の見果てぬ暗闇の中に浮いているのに驚く。

「此処は……！？」

『やあ、八神太一君』

「へ？　だ、誰だっ！」

突然の呼び掛けに驚いて、太一は声の聞こえてきた方を向いて怒鳴る。

そんな太一に、可笑しそうに笑う“声”。

『クックッ。そう身構えるな太一。そうだな、此処はテンプレ通り神だと答えておこうか』

「は？　神ぃ？」

“声”のトンデモ発言に、太一は素っ頓狂な声を上げてしまう。

ハッキリと言ってしまうと胡散臭い。

胡乱な目を向ける太一に、やはり笑いながら話す。

『だから構えるなって』

そこでふと太一は気付く。

「俺と……同じ声？」

『そこは気にするな』

2人の声は似通っている辺り、きっと中の人が同じなのだろう。

それはともかく、声の主は本題に入る。

『まあ、取り敢えず本題に入ろうか？』

「本題？」

『君の生前の功績を見込んで頼みたい事がある』

それは功績に対するご褒美プラス依頼で、生前の記憶と身体能力の継承に、特殊能力の附加が与えられる。

依頼に関しては受ける受けないは自由で、受けて貰えるなら特定の世界へと転生して貰う事になるのだ。

しかし、受けないならランダムに転生。

受けない場合、記憶継承の有無を選ぶ事も可能。

記憶継承をしない場合は、身体能力や附加能力を才能という形で与える事に……

依頼は謂わば序でに過ぎないから、好きに選んでくれて構わないと声は伝えた。

太一は首を捻って考える。

破格の条件、それは間違いないが依頼するなら何某かの危機に陥った世界が存在する事になるのでは？

そう思った。

「もしも断ったらその世界はどうなる？」

『自分で行くか、別の当てを捜すかするさ。さっきも言ったが、依頼は序でであって飽く迄も功績に対するご褒美なんだから。依頼を受けないなら気にしなくて良いよ』

「成る程……」

太一の頭に思い浮かんだのは、アドベンチャーゲームの選択肢。

依頼を受けますか？
しませんか？

→受ける
　受けない

ブンブンと首を振る。

何だか今、一瞬金の羽根に緑色の鎧を着た女性が微笑む姿が見えた気がしたが、被りを振って振り切る太一だった。

「（今のは幻、今のは幻……）」

太一も世界は選ばれし子供と呼ばれたが、本当は巻き込まれただけに過ぎない。

見渡せば力（アグモン）を得て、自分達しか出来ないから惰性で戦っていた。

デジモンを兵器にしたり、宗教に利用したりする秘密結社や宗教団体との戦いだって、半ば責任感に駆られたものだったと思う。

生き残れたのは、並の兵器や戦力など歯牙にも掛けない究極体、ウォーグレイモンが居てくれたから。

仲間達が優秀だったからに他ならない。

そんな自分が生前の功績のご褒美などと、特別扱いを受けて良いのかを悩んだ。

ただ、神を名乗る声は太一に言う。

仲間に恵まれない人生を歩む人間は、転生前に仲間を大事にしなかった事への罰を受けた人間で、才能を表せない人間は、転生前には才能に胡坐を掻いていたか或いは、溺れていた人間に対する罰を受けているのだと云う事を。

人生は更に上の階位へ上がる為の修業期間で、ご褒美はその第一ス

テップ。

罰はもう一度それらを見直す為のモノ。

太一はご褒美を受け取るだけの功績があり、ある意味ソレを受け取る義務があるのだと言う。

『記憶の継承は嘗ての記憶を持つ事で、更なるステップアップを可能とするモノだよ』

確かに記憶や意思が生前のままであれば、ステップアップも少しは楽だろう。

辛い事、悲しい事が沢山あった反面、嬉しい事も楽しい事も沢山あった。

記憶を失うのはあらゆる想い出を失う事と同義であると同時に、今のアイデンティティーを失う事だ。

記憶を失うのは新たな人生を生きる為、しかし記憶を継承するのは新たなステップアップをする為に……

太一は目を閉じ、再び開いた時には迷いなく真っ直ぐに空間を見据えて応えた。

「依頼を受ける！」

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

両親が事故で死んだ。

同じ車に乗りながら、自分だけが生き残ってしまう。

炎に包まれる車を眺めながら、涙を流していた。

助かったのは、母が車から押し出してくれたから。

優しかった両親が死んでしまったのがとても信じられなくて、未だ４歳でしかなかった少年はその現実を受け止めて涙したのだ。

レスキュー隊に保護され、唯一の親戚の夫婦が引き取ってくれた。

父親の従兄弟筋の夫婦で、まだ2歳の娘が婦人の胸元で眠っている。

この日、少年は一つの記憶を思い出していた。

【八神太一】だった時の、転生前の記憶。

奇しくも6月4日……

それは生前の【八神太一】の命日で、今生の少年にとっては誕生日。

そして、義妹となる少女の誕生日でもあった。

そう、この日彼は八神太一である事を思い出し、再誕したと同時に“八神太一”として八神夫妻の子供となったのだ。

そして、八神はやての義兄となって運命に立ち向かう事になる。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

あれから3年が経ち、漸く落ち着いてきた矢先の事。

義父と義母が事故で死んでしまった。

突然の訃報を聞き、太一は目の前が真っ暗になる。

「そんな、義父さんと義母さんまで……」

「太一兄ちゃん……」

まだ5歳のはやては、原因不明の病気で下半身が麻痺して車椅子生活になっていた為、バリアフリーの家を海鳴市に買って新生活を始める引っ越ししていたが、先に家に行っていた太一とはやてはともかく、荷物を運ぶ為に車で移動していた両親は還らぬ人となった。

前世の記憶を持つ太一だけなら何とかやっていけるだろうが、脚を悪くしていてまだ幼いはやてを抱えて生きていくのは難しい。

どうするか考えていたら、義父の古い友人だと名乗る人物から遺産の管理と援助を申し出てきた。

正直怪しいとは思ったが、はやての為に援助を受け容れる。

それから更に3年後。

「よし、親父の形見のデジヴァイス擬きと、何故か在ったデジモンカードのデッキも持ったし、通知表やらハンカチにティッシュなんかもオッケーっと」

太一は、出掛け前の持ち物チェックをしていた。

デジヴァイス擬きとデジモンカードは、実の父親が死んだ後の遺品整理をしていたら、書斎で太一が見付けた物だ。

ソレを見て、太一は転生前に神？　に言われていた事を思い出した。

『いつか太一の為の“力”が現世で見付かる。
ソレは必要な時期、必要な時に使い方が解るようになっているから、手に入れたらなるべく手放すな！」

デジヴァイス擬きとデジモンカードを見て、その瞬間に思い出した忠告。

だからピンとキた。

コレが自分に与えられたという、転生者としての力なのだと。

未だ使い方は解らないし、起動すらしないがいつも持ち歩いている。

「じゃあ、はやて！　行って来るな？」

「うん、行ってらっしゃ～い。太一兄ちゃん！
今日は進級のお祝いにご馳走作るんやから、早よ帰ってきてな～！？」

「判った！」

そんなやり取りの後、太一は玄関を出た。

今日から太一は新学年。

聖祥大付属小学校の五年生に進級したばかりの今日、この日に一つの事件に遭遇した太一は、ソレを切っ掛けにしてこの世界のキーパーソンと出逢うのだった。

.

第1話：太一新生（後書き）

第1話と云うよりは、プロローグっぽかったかな？
太一の置かれた立場を書いてみました。

第2話：誘拐（前書き）

やっとリリカルの主人公が登場です。

第2話：誘拐

・

退屈な始業式も終わって、漸く解放された太一は欠伸をしながら帰り支度をして玄関ホールに向かう。

それなりに親しくしている友達くらいは居るのだが、今日はなるべく早く帰るようにはやてから言われている為、サッカーもせず帰る心算だった。

靴箱から靴を取り出して、上履きを靴箱き入れて靴を履き、校庭に飛び出す。

遠目に校門を見れば、正に美少女と呼んで差し支えの無い女の子が2人、笑顔で会話をしていた。

待ち合わせでもしているのだろう、2人は特に校門から離れていく様子がない。

「（あの2人、レベル高いな～。下級生かな？）」

少なくとも先輩や同級生にあんな顔は見ない。

見ていれば忘れないだろう容姿だから、間違いない。

1人は紫の長髪に白いヘアバンドを着けた大人しそうな娘で、もう1人は鮮やかな長い金髪の、見た目活発そうな娘だ。

そんな2人の前に高級（たか）そうな、黒塗りの車が停まると中から黒服に

サングラスの男が2人程出て来て女の子の前に立った。

「はぁ、聖祥って割と裕福な家庭の人間が多いって聞いたけど、高級車での送迎かよ？　スゲーな」

などと、暢気に構えていたが2人の様子がおかしい。

ジリジリと男達から後退りしている。

「？　妙だな……あっ！」

どう見ても、嫌がる女の子を無理矢理に車へと押し込めようとしていた。

あの2人が悲鳴も上げないのは、手で口を塞がれているからの様だ。

「な！？　まさか誘拐か！」

言った瞬間、太一のベルトに付けていたデジヴァイス擬きが光を放つ。

太一が手に取ると、光が伸びて2人の女の子に照射された様に見えた。

しかし、何がどうと云う事も無く2人は連れ去られてしまう。

「し、しまった！」

デジヴァイス擬きに気を取られ、むざむざと誘拐されるのを見逃してしまった。

周りも漸く様子がおかしかった事に気が付いたのか、騒つき始めている。

そんな中に在って、栗色の髪の毛をリボンでツインテールに結った少女がキョロキョロとしながら、太一の傍まで歩いて来た。

「あれ～？　アリサちゃんとすずかちゃん、校門で待ってるって言ってたのに、何処にも居ない？」

その言葉に、先程攫われた2人の事を言っているのだと気付き、女の子に太一は話し掛ける。

「君、もしかして金髪の娘とヘアバンドを着けている紫の髪の娘と知り合い？」

「ふぇ？　は、はい……」

突然、肩を掴まれて捲くし立てられた少女は、驚愕と共に頷く。

「その2人が攫われた！」

「……へ？　アリサちゃんとすずかちゃんのお皿が割れた？」

あまりにもアホな応答に、思わず転けてしまう。

「アホ者かぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！？　皿が割れたじゃない。攫われた！
誘拐されたんだよ！」

「ふ……ふぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇっ！？」

太一が少女に事の経緯を伝えると、少女はアセアセと慌てながらポケットの中の携帯電話を取り出す。

「は、早く警察に！」

「待て！」

「？　何で？」

「警察への連絡は、大人の判断に任せるとしてだ。君は直ぐに彼女らの家族に連絡を！　俺はあの子達が何処に連れて行かれたのか捜すから！」

「え？　え？　ふぇぇぇぇぇぇぇぇっ！？」

走り去ってしまう太一を見送りながら、少女はオロオロしながら絶叫を上げた。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

少女……高町なのはは走っている。

男の子が突然、親友が拉致られたと伝えてきて混乱をしたが、警察より前に彼女らの家族に連絡しろと言われて、取り敢えずは月村家とバニングス家に連絡し、自分は両親が経営している喫茶店【翠屋】へ走った。

理由は月村家とバニングス家で、取り次ぎをしてくれた人が父である高町士郎に相談したいと言ってきたからだ。

なのはは翠屋に入ると、直ぐにカウンター席で接客をしている父に詰め寄る。

「お父さん、話があるの！」

何時に無い剣幕の娘に本気を見た高町士郎は、接客をアルバイトの娘に任せると奥に連れて行った。

「それで、どうしたんだいなのは？」

なのはは斯く斯く然々的に先程の事を話す。

話を聞いた後、直ぐに士郎は電話をする。

相手は息子、高町恭也だ。

荒事になるし、現役を退いて数年の自分が1人で何とか出来ると思う程、士郎は自惚れてはいない。

確実性を重視するならば、戦力を整える必要がある。

其処へ月村家の代表として恭也の恋人ですずかの姉の月村　忍と、アリサの父であるデビッド・バニングスがやって来た。

忍はメイドで、運転手も出来るノエルを連れており、デビッドも運転手の鮫島を引き連れて来ている。

詳しい話を聞いたデビッドと忍は、救出の算段を士郎と付ける為に話し合う。

警察に連絡をしても、場合によっては動けない可能性もあるし、月村家としてはあまり頼りたくは無い。

そういう意味では、目撃者の少年の判断は正鵠を射ていた。

だが、問題もある。

少年が、誘拐犯を捜す為に動いていると云う事。

下手に暴走されると、却ってアリサとすずかが危険に晒される。

焦ってもしょうがないが、なるべく急いで作戦を立てなければならなかった。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

少し刻は戻って……

太一は攫われた2人をどうやって捜すか、思案をしていた。

相手は一般的な車道で奔れば、明らかに目立つ黒塗りの高級車で逃走している。

聞き込みをすれば案外アッサリ判るかも知れないが、前世で１３０

年生きていたとはいえ、今は只の小学生に過ぎない自分がそんな事をしても成果は挙がらないと考えていた。

「あ、しまったな。仮に犯人を見付けてもあの子の連絡先が判らない……」

どうも焦りで自分を見失っていたらしく、うっかりとしていた事に気が付く。

とはいえ、どの道見付け出さなければ意味が無い。

どうしたものかと、さっき光を放ったデジヴァイス擬きを見つめながらボタンを操作する。

「う～ん。さっきは動いたんだけどな～」

起動はしているが、操作法が解らない為適当に操作をしている太一だった。

「嗚呼、もう！　意味ありげに動いたんなら、あの子達の居場所を教えてくれよな！？」

いい加減、太一が苛立ちながらデジヴァイス擬きを振ると、モニターにアリサとすずかのステータスが表示されてマップと矢印が表れる。モニターに直接表示されるのではなく、モニターから光が出て光点を結んで半透明のディスプレイが構築されていた。

「マップ？　もしかして、矢印の先に居るのか！？」

デジヴァイス擬きの機能を察すると、太一は矢印の方向へと向かっ

て走る。

太一は肉体に精神が引き摺られているのか、前世程の落ち着きが無くなっていた所為で、焦燥感が表情に出るくらい焦っていた。

前世に於いて、太一はデジモン関係で様々な裏組織とやり合っている。

望むと望まざるに拘らず、選ばれし子供達のリーダー的な立場になっていた太一は、率先して動かざるを得なかったのだ。

そして、そんな中で子供達が誘拐される事もあった。

パートナーデジモンを持つ子供を攫い、暗示や薬物で洗脳したりすれば強力な力が簡単に手に入るからだ。

自分達の思想に染めるのは時間が掛かるが、洗脳して使い潰すだけなら僅か一日程度で済む。

一日有れば、親兄弟ですら平気で殺せる様に仕向けるなど、その手の闇組織にとっては容易い作業だ。

その洗脳方法には下劣極まりないモノも有り、救出がある意味で間に合い、ある意味では間に合わなかった事も多々あった。

間に合ったというのは飽く迄も、洗脳されていなかったというだけの話であり、洗脳されず生命さえ有れば無事という訳では無い。

少年少女の区別無く、凌辱され続けて精神的に壊されていたからだ。

ああいう手合いは、男女も年齢も関係無く嘲笑いながら平然と、寧ろ嬉々として手出しする変態だから。

あの頃の口惜しさを思い出した太一は、奥歯を噛み締めながら走り続けた。

手にしたデジヴァイス擬きが導くままに。

あの2人を、絶対に救けるという“決意”を胸に……

.

第2話：誘拐（後書き）

太一はオリジナル設定で、裏組織や闇組織とぶつかっている為、その手の“組織”が大嫌いです。

第3話：アーマー進化（前書き）

この展開、実はテンプレだとは知らなかった……

第3話：アーマー進化

・

捕まったアリサとすずか。

後ろ手にロープで結ばれてしまい、柱に括られている所為で碌に身動きが取れないでいた。

そんなアリサとすずかの周りを囲む様に、数人の男が銘々に存在している。

音楽を聴いていたり、トランプをしていたりと遊んでいる者や、ただ座っている者など様々だ。

そんな様子を、太一は捜し当てた連中の隠れ家である廃屋に身を隠しながら覗いていた。

積極的に捜しに動いたとはいえ、何も太一は無茶な事をする気など毛頭無い。

しかし、何かあった場合はいつでも突っ込む心算でもある。

何も無ければ捕まっている彼女達の友人の少女が家族に連絡している筈だから、何らかのリアクションを待っていればいい。

太一は何も無ければいいなと祈りながら、中の様子を窺い続けていた。

只、問題は戦力だ。

太一が現在、持っている物と言えばデジヴァイス擬きとデジモンカード。

それに靴底に隠した暗器。

相手は恐らく拳銃で武装している筈。

太一の前世に於ける経験上では、あんな不釣り合いな高級車を動かせるなら只のチンピラが、小金欲しさに聖祥小学校の学生をランダムに誘拐という訳ではないだろう。

間違いなく、初めからあの2人をターゲットに設定していた筈なのだ。

詰まり、黒幕が必ずバックに存在している。

それも、ポンと高級車を与えられるくらいのバック。

ならば、非合法な拳銃を与えるくらい訳も無い事だ。

「さて、どうするかな？
コレが本当にデジヴァイスなら、何かしら力がある筈なんだけどな？　それに、カードも……」

デジヴァイス擬きを弄って見るが反応は特に無いし、カードもデジモンの絵柄や見た覚えのあるアイテムが描かれているだけ。

とても使えるとは思えない代物だ。

だいたい、デジヴァイスだけ有ってもパートナーデジモンが居ない今の八神太一では、宝の持ち腐れにしかならない。

連絡をする方法を持たない太一は、犯人側なり家族側なりが何かリアクションを起こさない限り、何も出来る事も無かった。

だから今はあらゆる事態を想定し、起こった事への対処をシミュレートする。

「済まない、2人共……

怖い思いをさせているが、もう少しだけ我慢をしていてくれ！」

血の気が恐怖から退いているのだろうか、顔色が少し青くなっていた。

「必ず救けてやるからな」

未だに行動出来ない自分を不甲斐なく思いながらも、決意を新たにした。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

一方、犯人側は事態が動かない為にブラブラしているしか無く、暇を持て余している様だ。

アリサは気丈な態度で振る舞っているが、味方がたった1人しか居ない状況に、心細さを感じている。

すずかも、元々が気弱な性格だったのが、恐怖心から塞ぎ込んでいた。

そんな2人を、暇な犯人達はニヤニヤしながら見つめている。

そんな中で、犯人の1人がすずかに話し掛けてきた。

「よう、お嬢ちゃん。お前さ、そんな可愛い顔してよ“化物”だって本当か？」

相変わらずのニヤけ面で、とんでもない事を言う。

しかしすずかは、その小さな肩をビクリと震わせる。

「アンタ、何言ってんの？
すずかが化物な訳無いじゃない！」

当然、この発言にアリサが喰って掛かった。

「へっ、お友達の癖に知らないんだな？　いいか、あの月村家っていうのはな、代々が吸血鬼の一族なんだってよ。要するに、人間の血を啜って生きる浅ましい化物の一族なんだよ！」

別の男が言う。

「化物の癖に、人間様の振りして近付いてガブリってか？　おお怖い」

ヘラヘラしながら身震いの真似をする男に、周りの男も下品な笑い声を上げた。

心配になったアリサがふとすずかを見ると、歯の根が合わないのかガチガチと震え、瞳には涙をいっぱいに溜めている。

少しでも何か衝撃を加えれば、簡単に決壊するダムの様な状態だ。

「すずか……」

その態度、反論も出来ない沈黙がまるで誘拐犯の言葉を肯定している様で、何を言っていいかアリサは判らなかった。

「なあ、こいつが化物って事はよ？　やっぱり人間とは構造が違うのか？」

「どうだかな？　少なくとも見える部分に差異は無さそうだけどな」

何故か目をギラギラさせた男が隣の男に聞くと、肩を竦めて答える。

男の意図は解っていた為、“またか”“しょうがない奴”というリアクション。

「じゃ、じゃあよ……見えない部分を見てみようぜ」

明らかに興奮状態にある男の言葉を聞いて、周囲の男達は止めるどころか逆に囃し立てた。

ソレを聞いたすずかは、もう真っ青に蒼褪める。

連中が何を話して、何をしようとしているのか解ってしまったから……

アリサも言葉が出ない。

しかし、すずかと同様蒼褪めていた。

「尻尾とか有ったりして？
或いは背中に蝙の羽根」

ジリジリと、目をギラつかせながらにじり寄って来る男の姿に、すずかは後退ろうとするが、背中には柱があって下がれない。

よく見れば、と言うか見たくもなかったが状況から目の前にある為、見せ付けられているのに等しいが……ともかく、にじり寄って来る男の股間は不自然なくらいに盛り上がっている。

「ヒッ！？」

思わずすずかは息を呑む。

男の手が、すずかの太股に触れる瞬間……

ガシャーンッ！　という硝子の割れる甲高い音が響いたかと思うと、男が吹き飛んでいた。

「グェ！？」

潰れた蛙の様な声と共に、男は気絶する。

一斉に身構える他の男達。

立っていたのは半袖に半ズボン、頭に青いバンダナを捲いて昔の戦闘機パイロットみたいなゴーグルをバンダナの上に着けた少年が、アリサとすずかを護る様に立っていた。

少年は男達を指差し、大声で叫ぶ。

「お前らの好きにはやらせねぇぞ！」

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

少し時間は遡り……

太一は突然動き始めた事態に、決断を迫られた。

このままでは、女の子の身が危機に曝される。

仮令、この後で生命が助かったとしても、一生物の傷を心に負ってしまう。

それを太一は許容出来ない……そう、出来ない理由があった。

装備は万端とはいかない。

それでも、事態が動き出した以上は静観など有り得ない状況だ。

冷や汗を流しながら嘗ての相棒に聞く。

「アグモン、俺はどうしたらいい？　俺は……っ！」

『太一の思うようにしたら良いと思うよ。太一の勇気がきっと誰かを救うから』

声が聞こえた気がした。

もちろん幻聴だ。

この言葉は、前世で実際にアグモンが悩む太一に掛けてくれた言葉。

しかし、スッキリした表情になると太一は此処には居ない相棒に語り掛ける。

「そうだよなアグモン。
悩む事は無いんだよな！」

その瞬間、カードホルダーから一枚のカードが飛び出して、デジヴァイス擬きが光を放った。

「こ、これは……？」

太一は意を決して、部屋へと硝子を割って飛び込んで行く。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

アリサもすずかも混乱していた。

突然、窓硝子をぶち破って入って来た同じ年頃の少年が、自分達を

護る様に立っている。

「だ、誰？」

アリサがそう呟くのも至極当然だろう。

太一は手にしたデジヴァイス擬きを構えると、まるで馴れ親しんだ道具を扱うかの様に、自然な動きで自然と声を出していた。

「カードスキャン！　勇気のデジメンタル！」

デジヴァイス擬きでカードに描かれたコードをなぞると、光が溢れ出して０と１が集まり形を成していく。

更にデジコードが覆って、明確な形に形成された。

炎の様な紋様を持ち、卵の様な形をして刃が突き出ている【勇気のデジメンタル】と呼ばれる物体へと。

「デジメンタル・アァァァァァァーップ！」

勇気のデジメンタルを掴んだ太一は、嘗ての後輩にして仲間だった宮本大輔がやっていた様に叫ぶ。

勇気のデジメンタルが太一に重なり、その身体が炎に包まれる。

行き成り焼身自殺みたいな光景を見せられ、アリサとすずか、黒服のチンピラは呆然となっていた。

しかし、太一の声が力強く響く。

「アーマー進化ぁぁっ！」

炎が収まると、其処には炎の紋様の鎧兜を纏った戦士がいる。

「八神太一、フレイドラフォーム！」

太一は高らかと名を名乗るのだった。

.

第3話：アーマー進化（後書き）

これが転生に際して太一が手に入れた“力”の一端となります。

神場　司さん、三毛猫ヤマトさん、ファントムさん、龍気さん、感想をありがとうございます。

次回
第４話：取り引き
無印に入るのはもう少し先になりそうです。

第４話：取り引き（前書き）

戦闘描写は難しいです。

神場　司さんの指摘で、普通の鎧を考えていたフレイドラフォームを、バリアジャケットにしてみました。

第４話：取り引き

・

フレイドラフォーム。

フレイドラモンの様な丸みや大きさは無く、アーム、ブーツ、ニー、ヘッドの各パーツは太一に違和感無く装着されている。

両腕のアームには三叉爪が着いていて、武闘家の様な戦闘スタイルだ。

また、身体を覆うのは袖の無い炎の紋様が描かれているコートになって、鎧程の強度が有るか疑問だった。

総合して見れば、近接戦闘を主体としたバリアジャケットの様なモノだろう。

ゴツさの無い金属部は、動き易さを前提としていた。

「さあ、征くぞ！」

「舐めるなガキがぁぁぁぁっ！」

数人の男達が手にした拳銃から、発砲される鉛弾。

それは十数発の暴力となって、太一を突き刺す為に向かっていった。

「「キャァァァァァァァァァァァァッ！」」

パン！　というドラマなんかとは違う間抜けな轟音が響き、太一が殺られたという思いからアリサとすずかは悲鳴と共に目を閉じた。

しかし、太一の装備はただの防具ではない。

弾道を計算、到達地点の予測して最適な迎撃ポイントを教える。

更に、引き上げられた反射神経が弾丸を弾く為の速度を与えてくれていた。

元々、前世で得たスキルや身体能力を引き継いでいるのにプラスしている事もあり、太一は次々と迫り来る弾丸を迎撃する。

驚愕する男達。

「な、莫迦な！？」

叫んだのがいけなかった。

太一の狙いはその男へ絞られる。

「うりゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！」

振り下ろされる三叉爪に引き裂かれる男。

とはいっても、未だに子供の太一が血に穢れない様に配慮したのか、非殺傷設定にされているが。

非殺傷……しかし、魔導師のソレとは違ってその痛みは本物である為、気絶出来なければ痛みでのた打ち回る事になる。

太一は1人目の男を倒したのを一瞬だけ確認すると、直ぐに次へとむかった。

「ナックルファイア！」

炎を纏った拳を握りしめ、男へと放つ。

「ごはっ！」

炎をぶつけられ、気絶する男。

「死にさらせぇ！」

背後から狙い撃ってくる。

パンッ！　放たれた弾丸が太一の後頭部に向かう。

「ファイア・ウォォォォォーールッ！」

足下から炎が噴き上がり、弾丸を止めた。

「な……っ？」

「フレイム……クロォォォォォーーッ！」

爪に纏う炎を放ち、背後の男を焼き裂く。

「やっぱり……フレイドラモンの技だけじゃない。俺の思い描いた通りの技も使えるみたいだ！」

この時の太一は知る由も無いが、そもそも太一が持つデジヴァイス擬きは魔導師が持つデバイスと同じ。

その力の源は太一の【リンカーコア】から供給される魔力だ。

転生の際に、デジモンの力を管理局が質量兵器などと言い掛かりを付けられない様に、太一を転生させた存在は太一にリンカーコアを与えていた。

リンカーコアはどんな人間にも必ず在るが、大抵の者は不活性か若しくは魔法が起動出来ないくらいに小さい為、魔法を使えない。

転生者は、基本的に【受容世界】と呼ばれる世界に生を受ける。

それはアニメや漫画や小説といった形で、平行世界の出来事を情報としてクリエイター達が受け取り、発表している世界だ。

それが何らかのトラブル、乃至は寿命で死亡した後で神やそれに準ずる（天使や悪魔）存在が情報原典世界から分岐した平行世界へと転生させ（られ）る。

その為、転生者は大小こそあれ原典世界の知識を持って動けるのだ。

問題は太一がこのリリカルなのは世界と同様、原典世界から分岐した平行世界の生まれだと云う事と、その世界は魔法が認知されていないと云う事。

従って八神太一には魔力が無い……リンカーコアが不活性なタイプだった。

だから転生後の太一は記憶が甦ると同時に、リンカーコアが活性化するようにされ、その魔力量は管理局で云う処のＳランク。

他の一般的な転生者みたいに無茶な魔力量（ＳＳＳ以上）ではないが、太一の場合はデジモンの能力を自らにインストールして、単純なスペック以上の能力を使える上、前世での戦いの知識や経験値を活かす事で、チート級に戦える。

フレイドラモンの必殺技以外にも太一が思い描いた技（魔法）が使えるのも、正にその恩恵によるモノだ。

そう、太一が使っているのはデジモンの必殺技ではなく、魔法の一種。

魔方陣が出ないのは、デジヴァイスが魔方陣の代わりとなって処理している為。

太一が技を使う度、デジヴァイスのモニターに朱色の魔方陣が浮かんでいた。

「ブレイズトルネード！」

全身に炎を纏い、両腕を挙げて手を組むと回転しながら敵に突っ込んでいく。

ウォーグレイモンの必殺技の一つ、ブレイブトルネードみたいな技だ。

「ギャァァァァァァッ！」

吹き飛ぶ男。

天井に激突させられ、白目を剥いて気絶する。

「お前で最後だ！」

「くっ、クソ！」

恐怖と驚愕が入り混じった顔で、拳銃を構えるがその対象はすずか。

流石に狼狽する太一。

「貴様っ！？」

「は、はは……どうせ終わりなら、化物を殺してやるぜぇ！」

「ヤメロォォォォォッ！」

パン！

叫びも空しく……

引き金は引かれて……

撃鉄は火薬を炸裂させ……

弾丸が銃身（バレル）を通って……

すずかへと向かって飛び出してしまった。

先程までの喧騒が嘘の様にシンとなる廃屋。

すずかが撃たれたと認識したアリサは、息を呑んで目を閉じる。

すずかも衝撃と痛みを覚悟して、心臓と頭を庇った。

だけど、覚悟していた痛みがいつまで経っても訪れない事を不振に思い、すずかはソッと顔を上げてみる。

其処には、すずかを庇って左の二の腕から血を流している太一が居た。

「あ、あ……？　どう……して……」

流れる血に、すずかは太一に訊ねる。

「大丈夫だったか？」

質問には答えず、確認してきた太一にすずかは小さく首肯した。

「莫迦な、どうやって？」

後退りする男を睨み付けると、立ち上がって殺気をぶつける。

「ヒィッ！？」

それはあまりにも濃厚で、荒事を日常としている男でさえ怯む程だ？

「許さん……」

激昂はしない。
やるべき事は理解しているし、出来るだけの“力”も在る。
だから後はやるだけだ。
「発っ！」
太一は飛び上がると、炎を脚に纏って急降下蹴りを男へと放つ。
「流星火炎脚っ！」
「ガハァァァァッ！」
蹴りは男の胸を貫き、男は壁に激突した衝撃で脆くなっていた壁に穴を空けて、アスファルトに墜落した。
敵も居なくなり、太一は振り返ると少女達の無事を確認してフッと笑う。
拘束を解いてやるべく歩を進めると、突然殺気を籠めた男が部屋へと乱入する。
「まだ居たのか！？」
「アリサちゃんとすずかちゃんから離れろっ！」
二本の小太刀を持った男が太一に斬り掛かる。

太一も爪に炎を宿して迎撃に移った。

ぶつかり合う刃と刃。

お互いに闘志を漲らせて、攻撃し合う。

ソレを止めたのは、普段は大人しい少女の叫び……

「ヤメテエエエエエエエエエエエエエエエ～ッ！」

その様子に、隣で耳を塞いでいたアリサは何だかスゴいデジャブを感じていた。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

場所は移って、月村邸……

太一は（強制的）月村邸に連れて来られ、一室ですずかに似た女性と太一に斬り掛かってきた男と机を挟んで対峙していた。

既に太一は一連の事態を、女性に話している。

女性の名前は月村　忍。

すずかの10歳くらい離れた姉だという。

男の名前は高町恭也。

忍の恋人で、太一が伝言を頼んだ少女の兄らしい。

「話は解ったわ。詰まり、貴方は攫われた2人を捜して、見張っていたけど危険に曝されたすずかを救ける為に戦ったと……成る程、立派だわ」

「だが、同時に無謀でもある！」

忍の言葉に、恭也が口を挿んできた。

「なら、貴方達が来るのを待っていれば良かったと？
それとも、そもそも関わらなければ良かったのか？」

「む、それは……」

太一に問われ、言葉を詰まらせる恭也。

もしも太一が関わらなければ、すずかがどうなっていたか……

結果論とはいえ、既に証明されてしまっている。

「まあ、私としてはすずかが無事だったし、とやかくは言わないわ。問題なのは次よ」

忍の言葉に、太一は居住まいを正す。

「八神太一君、貴方は私達の秘密を知ってしまったのかしら？」

「秘密？　連中の言ってた人間の振りをして、人間の血を啜る化物ってのか？」

「そう、知ってしまったのね……」
沈痛な面持ちで、忍は太一に言った。
「貴方には二つの選択肢があるわ。一つ、記憶を消して全てを忘れる事。
二つ、すずかと契約をする事……どうする？」
「契約？」
「そう、何も難しい話ではないのよ。どんな形でも良いから、すずかと離れない……共に在る事を約束してくれればいいのよ。
それは例えば友達でも良いし、何なら恋人でも良い」
要は一定の距離以上を離れない関係をすずかと結び、決して裏切らない事を約束すれば良いと云う事だ。
「で、契約しないなら記憶を消すって事か？」
太一の問い掛けを聞き、忍はコクリと首肯した。
「なら……どちらも断らせて貰う！」
「「っ！？」」
恭也も忍も驚愕する。
どちらも断る……詰まり、契約はしないし記憶も消させないと云う事。

アッサリと大前提から覆す太一の言葉に、忍も恭也も呆然となるのだった。

・

第４話：取り引き（後書き）

転生者の云々は、自サイトの頃からの設定です。

神場　司さん、鷹さん、感想を戴きありがとうございます。

次回
第５話：自らの選択
宜しくお願いします。

第5話：自らの選択（前書き）

太一が少し意固地なキャラに見える……

そういえば、アリシア生存とかどうしよう？

第5話：自らの選択

.

「どういう……意味かしら？」

僅かに籠もる殺気と怒気。

一瞬、忍の瞳が紅くなった気がした。

すずかと契約を交わすか、それとも記憶を消して忘れるか、忍から提示してきた二択を太一はどちらも選ばないとハッキリと言う。

「それは、言い触らすと考えていいの？」

忍の殺気や怒気をアッサリと受け流し、太一は話す。

「秘密だと言うなら別に、敢えて言い触らしたりはしないさ。ただ、契約だの記憶を消すだの選ぶ余地すら無い選択はしないだけだ」

太一は嘗て、選ばれし子供としてデジタルワールドの安定を望む存在に、他の6人の子供達と共にデジタルワールドへと喚ばれた。

其処で太一はアグモンと出逢い、有耶無耶の内に戦いに巻き込まれてしまう。

最初の内は、襲い来る敵に生き残る為に已む無く対抗し、戦いを続ける中に在ってよく解らない使命感から戦う様になる。

デジタルワールドの数度に渡る異変が収まってから、今度は人間界

でのデジモンに関するトラブルが発生。

最初のデジモン異変では、みんなを引っ張っていった太一がリーダー的な感じに祭り上げられた。

同じく先の戦いでリーダー的だった宮本大輔も、太一を推した為本当にいつの間にかデジモンと人間を結ぶ架け橋とされてしまう。

決して太一自身が“選んで戦った訳でも、リーダーになった訳でも”なかった。

今更その事を後悔した事も無いが、太一は今生でやるべき事として“選択は自ら行う”と決めている。

しかし、先の忍が提示した選択肢は……

「月村さん、アンタの言った選択肢は本質的に同じなんだ！　契約するにせよ、記憶を消すにせよ。自分達の秘密を守る為には信頼も無く、ただ強制的に従わせようとする一点に於いて」

「……そ、そんな事は」

ハッキリと言う太一に対して、忍もしどろもどろになってしまう。

不利を覚ったのか、恭也が口を挿む。

「おいガキ！　口が過ぎるぞ？」

「黙れよ、青二才が！」

睨み付けながら言う。

「あ、青二才！？」

明らかに１０は年下の少年に青二才呼ばわりされて、顔を引き吊らせる恭也。

「てめえとは話してないんだよ！　行き成り罪も無い人間に、真剣で斬り付ける様な危険人物が！」

「恭也、話が進まないから黙ってて！」

２人に捲くし立てられて、床にのの字を書き始めた。

「危険人物……黙れって……」

「……恭也は放っておくとして、貴方はすずかが嫌い？」

忍は取り敢えず恭也を放置すると、話を続けた。

「会って間もなく、好きも嫌いも無いと思うけど？」

一目惚れというのも在るだろうが、それは結局のところ容姿だけ見て惚れたか、見た瞬間に何かしら惹かれるものが在ったか……

前者はともかく、後者に関しては特殊なケースだ。

「姉の私が言うのも何だけど、あの子は世間的に見て可愛いと思うのよ。少し大人しめで引っ込み思案なトコはあるけど、マイナスになる程じゃ無い。いえ、寧ろ今時珍しい大和撫子って感じで良くな

い？
それに、月村の直系と仲良くなる機会なんて、社交の世界じゃ得たくても得られない人が殆んどよ？」
すずかとの契約のメリットを聞かせ、何とか考え直させようと画策する忍。
「成る程……確かにあの子は可愛い。将来は“貴女の様な”美人になるだろう」
「で、でしょう？」
「容姿が貴女とよく似てるし、自画自賛に聞こえたけどね」
「……あれ？」
「まあ、問題は其処じゃない。問題なのは選択肢二つが本質的に同じって事。
俺は誰にも喋らない。
言い触らしたりしないから契約も、記憶消去も無し。記憶を消して知られた事を無かった事にするか、契約の鎖で相手を縛るかじゃなく、先ずは信頼する処からじゃないのか？」
とても１０歳とは思えない言動に、忍は戸惑いを隠せずにいた。
どうにもやり難い。
一方の太一も自身の価値観を他人にただ押し付けようとは思ってないし、何処かで落としどころ（妥協点）を見付けて提示する必要があるな……と考える。

このままでは【記憶消去も契約もしない】と【記憶を消すか契約をして貰う】の相反する意見をイタズラにぶつけ合うだけで、平行線を辿ってしまう。

間を取った妥協点を提示して、互いに納得するしか話を終わらせる手段は無い。

相手が悪名高い“アイツ等”であれば力ずくや強引な手法もあるが、彼女はただ家族を護りたいだけ。

そんな月村　忍に自分の持つ価値観を、必要以上に押し付けるのも違うだろう。

そんな事を考えていると、扉をノックする音が響く。

ガチャリとノブを捻って、扉を開けて入って来たのは何やら箱を手に持つすずかと、銀トレイに陶器製のポットとやはり陶器製のソーサーの上に載ったカップを持つメイドさん。

何故かすずかもメイド服を着て入って来た。

「どうしたの、すずか？」

「お姉ちゃん、まだお話が終わらないなら少し休憩にしない？　恭也さんのお父さん……士郎さんが翠屋のケーキを持って来てくれたんだ」

実は、メイド服は忍の仕込みだったりする。

姉の問いに答えるすずか。

確かに少し白熱し過ぎてしまったからか、喉が渇いてきている。

忍と太一は互いに頷き合うと、休憩する事にした。

基本的な給仕は、月村家の本物のメイド【ノエル・綺堂・エーアリヒカイト】が行ったが、太一の紅茶だけはすずかが淹れる。

忍の仕込み通りに、メイドのコスプレですずかをアピールしに来たのだ。

アリサは別室で、なのはとお茶を飲んでいる。

此方にはケーキを持ってきた士郎も一緒に居て、給仕役はノエルの妹【ファリン・綺堂・エーアリヒカイト】がドジを踏みながらもやっていた。

時折、彼方側から『ごめんなさ〜い！』という声が聞こえてきて、その度ノエルが『またか』という顔をして被りを振る。

紅茶を淹れて数分……

陶器と陶器が接触する子気味良い音が、月村の邸にある一室に響いた。

太一は紅茶を飲み、カップをソーサーへと置く。

「中々堂に座った飲み方ね？　何処かで習ったの？」

忍が太一の飲み方に感心して問い掛ける。
「まあ、人生永いと色々と見る機会にも恵まれてね」
太一の答えに、此処に居る全員がツッコんだ。
『おいおい、１０歳……』
勿論、心の中で。
因みに太一は数えで１１歳だが、誕生日が６月４日の為まだ忍達からは１０歳に数えられている。
「それにしても、このケーキは美味いな」
太一はケーキを食べて感嘆の声を上げた。
「恭也のお母さん……桃子さんはここいらでは有名なパティシエールだもの。
特に桃子さんの特製シュークリームは……」
「へぇ」
舌鼓を打つ太一。
「あれ？　恭也さんは食べないんですか？」
「俺は……いい。ウップ！」
恭也は昔、散々と桃子から食べさせられた経験がある為、甘い物が

苦手だった。

「ああ、じゃあ貰っても良いかな？　妹のお土産に欲しいんで」

「妹さんが居るの？」

「まぁな」

忍はノエルに言って、お土産に恭也が手を付けなかったケーキを包ませる。

そんな中で、すずかが妙に頬を朱らめながらモジモジとして訊いてきた。

「あ、あの～。それで……お、お話しはどうなったんですか？」

すずかは美人な姉の妹として、少しくらいは見られた容姿だと自覚している。

それに、大きな邸を構える程度には裕福だ。

それなりの優良物件だと、多少は自惚れても罪は無いと思う。

だから記憶を消されるくらいなら、自分を欲しいと思ってくれると良いなと……

そう考えていた。

きっとそういう方向で進んでいると思っていたのに、忍は困った顔をしている。

それで覚った。

すずかが口を開く前に、応える太一。

「月村、俺はどちらも望まない。契約はしない。記憶も消させない！」

「あ……」

正直、自分の正体がアリサと目の前の先輩にバレてしまって、未来が真っ暗になった気がしていた。

記憶を消せば元通りなんて思える程、すずかは人間の仲を軽く見てはいない。

化物と関わるのが嫌で記憶を消すとか、そんな風に言われたら二度とアリサには近付けないだろう。

しかしアリサは……

『このアリサ・バニングスを舐めんじゃないわよ！
すずかが仮令、何者だろうが私の大切な親友よ！』

そう言って、契約を交わしてくれた。

本当に嬉しかったのだ。

だけど今、地獄に叩き込まれた気分になってしまう。

本が好きなすずかは、物語に出て来るピンチのお姫様を救う騎士に憧れた。

いつか自分にもこの忌まわしい【夜の一族】としての軛から解き放ってくれる、優しい騎士が現われると良いなと思っていたのだ。

実際、姉の忍には高町恭也というぶっきらぼうだけど強い騎士？が現れた。

だから余計に思う。

自分にとっての“騎士”が現れて欲しい、八神先輩に騎士になって欲しいと。

その期待が、脆くも崩れさってしまった。

すずかは、万が一の時の為に忍から教わっていた必殺技を発動する。

「あの……八神先輩、私じゃ……ダメ……ですか？」

科を作り、潤んだ瞳（泣き掛けていたから演技では無い）で、頬を朱らめながら上目遣いをして、オプションとしてメイド衣装まで着けた……忍曰く“女の子の男を堕とす必殺技”だ。

確かに、卑怯なまでに破壊力に優れていた。

並の男なら確実に堕ちる。

しかし……

「悪いな月村。俺は自分の気持ちに嘘は付けん」

太一はＮＯと言える日本人だったらしい。

死にたくなるくらいに恥ずかしいのを我慢してまでやったのに、まるで効果が無い事にすずかは姉を恨みががましい目で睨む。

飴と鞭作戦も、色仕掛けも駄目では、最早どうにもならない。

だけどこのまま帰す訳にもいかないのだ。

すずかの気持ちはさて置いて、一族を護る為にも。

喋らないと言ってはいるのだが、何処まで信じて良いのかが判らない。

ただの善意だと信じられる程、一族は腑抜けていないのだから。

そんなタイミングで、太一が話を切り出してきた。

「こうしよう、一週間だ。

一週間、俺と妹に翠屋での食事を奢って貰う。

よく識らない相手が信じられないなら、識る機会にもなるし、俺は月村を救けた報酬と口止め料を貰う事になる。善意で喋らない……では信じられなくてもさ、それならどうだ？　俺自身も自分で選んだ選択肢として納得が出来るしな」

成る程、よく考えられている提案だ。

本当に信用がならない人間ならともかく、太一は信用出来る。

ただ楔が欲しかっただけ。

それに……

忍は笑う。

「ふふ……良いわ。貴方、面白い。それなら一週間と言わず一ヶ月は奢りましょう！」

これですずかが太一の傍に居る口実が、一ヶ月間確保出来る。

「（後は、すずか……貴女次第よ）」

忍のアイコンタクトを受けて、すずかは姉の援護射撃に気が付く。

成る程、契約が駄目ならば自ら堕とす。

太一は契約が駄目とは言ったが、すずかが駄目だとは言っていない。

知り合う機会があれば、未だにチャンスがあるのだ。

そして一ヶ月の間、太一とすずかが自らに科した選択肢がぶつかり合う……

……筈だった。

この時、すずかは思いもしなかったのだ。

その間に、ライバルが増えてしまうなどと……

.

第5話：自らの選択（後書き）

もうすぐ無印に入ります。

皇　翠輝さん、龍気さん、八神太一さん、神無さん、感想をありがとうございます。

神無さん、月乃杜の勉強不足から名前を書き切れずに申し訳ありません。

良ければ何と書けば変換出来るかを、教えて頂ければ助かります。

次回

第6話：初めまして

無印の敵、原作通りの暴走体とデジモンどっちが良いかな？　悩みは尽きない。

第６話：初めまして（前書き）

実は対話は続きます。

第6話：初めまして

.

「ただいま～！」

「太一兄ちゃん、お帰りなさ～い！」

車椅子に乗ったはやてが出迎えてくれた。

「今日は遅かったなぁ？
どないしたん？」

「ああ、ちょっとな」

傷の手当ては忍の指示で、すずかがしてくれた。

破れた服はノエルが繕ってくれた為、よく見なければはやてにバレはしないだろうが結構ヒヤヒヤする。

食事を摂り、風呂に入って自分の部屋で寛ぎ……

今日の出来事を振り返る。

「明らかに焦り過ぎたな。
連絡先も聞かずに突っ走っちまったし、月村やバニングスの情報網が無ければあの場所、見付からなかったかも知れないな……
まるであの頃の様だ」

アグモンがデジモンカイザーに捕まったと聞き、焦って後輩達に当

たり散らしてしまった。

自分ではアレで冷静な気でいたのだから、今にして思えば笑ってしまう。

ヤマトに引っ張叩かれて、漸く本当に頭が冷えた。

まあ、今度は大輔がヤマトの行為に納得していなかったが。

「はぁ、難しいよな……？
ヤマト、空」

肉体に精神を引っ張られるのは、転生前に修業を付けてくれた神？
から聞いていたけど、まさかあの頃の様な無様を晒す程とは思わなかった太一。

「いや、単に俺の精神修養が未だに未熟なだけか？」

そして考えるのは月村家での出来事。

交渉は先に折れた方が負けるが、太一の交渉は自分から折れる時こそが勝負。

タイミングよく折れて見せる事で、相手側からの譲歩を引き出す。

デジモン関係で様々な思惑が錯綜した中、太一が交渉の席に着いた事も何度かあった為に身に付いた技術。

「一族の掟……か」

忍から夜の一族について、詳しくは聞いてないし聞く権利も無い。
契約を突っ張ねたのだから当然ではあるが。
しかし2人を誘拐した連中のセリフから、ある程度は類推出来る。
一族を、家族を護る為に掟が存在するのは理解した。
人間と云う奴は、自分が受け容れられない事柄が在ればどうするか？
叩き、排除するだろう。
若しくは諂い、利用をするかも知れない。
或いは大きな力（権力や暴力）を以て、従わせようとするか……
どれもデジモンの事で起きた出来事なだけに、彼女らの言い分も理解は出来る。
が、夜の一族に譲れない何かがあるなら、太一にだってソレは有った。
彼女らのソレに比べれば、小さなものかも知れない。
それでも……
ひとつは矜持。
今一つはヤマトと空と……仲間達と得てきた。

「お互いに譲れないから……ぶつかり合うか」

それが悪意であれ、善意であれ何かしら譲れないモノがある。

暗黒デジモンとやり合った時、彼らは何を求めて世界を獲ようとしたのか……

それはきっと自分では絶対に理解は出来ないのだろうが、滅ぼし合うしかなかったのだとしても、知る事は出来た筈。

「そう、解り合う為の時間が欲しかった……」

太一は仰向けに寝転がり、天井に右腕を伸ばすと開いた手をグッと握った。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「そう……断られた挙げ句に記憶も消さず、それどころか相手の掌の上で踊らされたって事？」

突然の電話はよく知る少女からだった。

シャワーを浴びて、サッパリした直後に鳴り響いてきた電話のコール音。

肢体を拭くと、バスタオルを巻き付けて電話を取る。

ピンクの長い髪の毛は未だ水に濡れた状態な為、ハンドタオルを片

手に髪の毛を拭いていた。
何とも扇状的な姿だ。
〔ごめん、さくら……〕
「良いわ。裏との関与が無い事は既に調べが付いてるし、家族構成も把握済み。
下手な行動を取れば直ぐに処置出来る様、手の者を送ってあるから……」
太一の身辺調査をしたのは他ならぬさくら自身。
綺堂家は月村家と同族。
さくらは吸血種と人狼の混血で、狼の耳と尻尾を出す事も出来た。
歳は忍と近いが、続柄は忍の叔母に当たる。
そんなさくらが、太一を月村邸に引き留めている間に身辺調査をして、裏との関与を調べたのだ。
結果は白。
唯一、謎の力以外は特に裏とは関わっていなかった。
「やはり……一度、会う必要があるわね。セッティング、出来る？
忍」
〔彼自身が必然的に会う様に条件を付けてきたから、会うだけなら

明日にでも〕

「そっか、なら明日……」

〔判った。遅くにごめんねさくら〕

「問題無いわ。一族にとっての大事だしね」

電話を切ると、さくらと呼ばれた女性はそのまま髪の毛を拭き終わると、ドライヤーで乾かしながら櫛で梳いていく。

裏との関わりが認められなかったとはいえ、相手は未知の力の持ち主……

「八神太一……か。果たして忍の判断が吉と出るか、凶と出るか。もし、一族に影を落とす者なら……」

―覚悟を決める！―

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

ユッサユッサと、太一は身体を揺さ振られていた。

「う……ん……」

しかし軽く身動ぎした程度で起きる気配は無い。

再び揺さ振られるがやはり変化は無かった。

「……早よ起きぃ！」

声を掛けても……

「う～ん、後６時間」

現在、夜中の１時。

的確に起きる時間を言ってくる辺り、大したものだが起こそうとしている方は、額に青筋を浮かべると……

「とっとと起きんか～い！」

スパーン！　と、何処からともなく取り出したハリセンで引っ張たく。

「ごはぁぁ！？」

ハリセンで頬を張られて、吹き飛んだ太一はそのままゴロゴロと転がっていくと壁にぶつかった。

「痛たたた～。な、な、な……何なんだ一体？」

「ようやっと起きたな！」

「……は？」

目の前の不審人物。

髪の毛の長さは違うが、見た覚えのある茶髪。
よく識る顔……だけど明らかに違う身長。
服装は何とも言えない様なコスプレチックで、背中には黒い羽根が左右に六枚。
「は、は、は……」
「何を笑うとるん？」
「はやてが“巨大化”したぁぁぁぁぁっ！？」
目の前の女性を指差して、驚愕を露にする太一。
スパーン！
再び太一のド頭に炸裂するハリセン。
「アホかっ！　巨大化って何やねん？　せめて、成長言わんかい！」
頭を押さえながらはやて？　を見つめる。
成る程、変なコスプレを除けば確かにはやてを成長させた姿だと言えなくない。
「何で成長してるんだ？」
デジモンじゃあるまいし、行き成りワープ進化した筈も無いだろうが、はやてはまだ８歳。

しかし今、太一の前に立つはやて？　は２０歳前半。
その時、ふと思い至る。
「まさか、平行世界の……」
するとはやてはニコリと微笑むと、口を開いた。
「正解や。私は君の識っとる八神はやてとは別の存在であり、同じモノ……
私の名前は八神はやてや。
初めまして八神太一君」
「はやて（義妹）の……
【異時空同位体】！？」
それは唐突で、あまりにも突然の邂逅だった。
「本来ならこんなに早よう逢う筈や無かったやけど、ちょう聞きたい事が有ってな……」
「聞きたい事？」
「ん、何や君……デジヴァイスを使い熟しとらんみたいやからな」
「デジヴァイス？　じゃあやっぱりこれ、そうなのか！？」
驚く太一を見て、頭を抱えるはやて。

「太一君はそのデジヴァイスについて、どんだけ聞かされとる？」

「サッパリ」

首を振りながら答えた。

それを聞いて、益々肩を落とす。

「やっぱりか、シィ君って時々大切な事を忘れるな」

「？」

はやては或る一点を除き、デジヴァイスについて説明をしておく。

いざという時に戦えるように、未来に備える為だ。

名前はデジヴァイス・アカシック・スキャナー。

通称Ｄ－アカシック。

情報根源識への接触すらも可能とし、あらゆるデータを引き出せる特殊なデジヴァイス。

カードから情報を引き出して、そのカードの力を得る事も可能としている。

また、封印式を起動すればあらゆる存在をデジタライズして封印可能。

その他にも便利な機能等が備わっている。

説明を受けた太一は、デジヴァイスを見ながら感心していた。
尤も一番の特徴、アグモンの魂と一体化して最終的にはあらゆるグレイモン系の技を使える様になる機能については、Ｄ－アカシックの管制人格であるアグモンが目覚めていない事もあって、教えなかったが。

「ま、取り敢えずはこんなトコやな」

大方の話を聞いた太一。

「Ｄ－アカシック……か」

「太一君、シィ君から四天志真流は習ったんな？
何処まで使えるん？」

「え、あ……【神風】まで……」

「～ん、せやったら早よう【瞬光】を覚えた方がエエで？　恭也さんの小太刀二刀御神流には『神速』があるからな～」

「？」

太一は転生前に神？　から武術を習っていた。

それが四天志真流だ。

速さ主体の実戦的武術で、すずかとアリサ達を救出したのも高速移動技【神風】を発動させたものだ。

因みに、本来の速度はストライカー時のフェイトの真・ソニックフォームの時と同等以上の速度が出る。

流石に太一は其処までの速度を出せないが。

「まあエエか。私はもう行くわ、またその内会うやろ」

「あ、おい？」

窓からトンと跳ぶと、羽根を羽ばたかせて大空へと翔び上がった。

はやてが太一の方を振り向くと、小さく何かを太一に対して呟く。

「この世界の私を、宜しくな？　“太一兄ちゃん”」

わざわざこの世界のはやての太一への呼び方で呼び、クスリと微笑んだ。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

翌日、太一ははやてに夕飯を外で食べる事を伝えて、学校へと向かった。

学校では特に何も起きなかった為、静かなものだ。

ひょっとしたら説明をしろと、アリサ辺りが怒鳴り込んで来るかと思った。

勝ち気そうだったし。

「ま、流石に上級生の教室までは来ないか」

そんな感じで時間は過ぎ、太一ははやてを連れて翠屋へと向かう。

はやては早々に店内に案内され、太一は別の場所へと呼ばれる。

其処に居たのは、ピンク色の長い髪の毛にスーツ姿の女性。

「初めまして、八神太一君……」

「どうやら自己紹介の必要は無いみたいだな？」

「ええ、私は綺堂さくら。

忍とすずかの身内……よ」

微笑んではいるが、成る程……忍と比べても余程迫力がある。

互いに、色々と聞きたい事も言いたい事もあるから、“本当の意味”での対話が始まった。

・

第6話：初めまして（後書き）

そして対話は続くのです。

異時空同位体の八神はやてが何処の何者か、判る人は居ないだろうな～。

三龍さん、蒼き星さん、フェフさん、八神太一さん、ワラワラさん、しんちゃんさん、流派西方不敗さん、神無鴇人さん、ジゴーさん、感想をありがとうございます。

神無鴇人さん、読み方を教えて頂いて助かりました。

蒼き星さんの指摘により、オリジナルは修正しましたが……こっちは再編集が出来ない。

次回
第7話：完全な和解に向け
宜しくお願いします。

第7話：和解に向けて（前書き）

サイトの方をやってたら、遅くなりました。
少しだけタイトルが違ったりして……

第7話：和解に向けて

・

太一を待ち構えていたのはピンクの長い髪の毛に、少し吊り目な青みが掛かった綺麗な瞳。

スーツ姿のその女性は綺堂さくらと名乗った。

互いに挨拶をすると、翠屋の別室へ通され席に着く。

「さて、八神太一君。忍とすずかの両親は現在海外に居て、あの子達の仮の責任者は私が務めているわ」

「それじゃ、恭也……とか呼ばれていた人は？」

「高町恭也君……ね？

彼は……忍の恋人よ。去年の……身内の不始末が原因でね、秘密を知られちゃったのよ」

去年の事、高町恭也を主軸として様々な出来事が起きていた。

詳しくは【心と絆の三角形】と被り、解決していったのが恭也と言う事で割愛をするが、その中に月村家で起きた事件がある。

月村家のあるモノを狙った月村安次郎が、色々な嫌がらせや明らかな犯罪行為を行ってきた。

すずかへの誘拐未遂などもあったが、忍が腕を落とされて重傷となった事件。

その際、恭也が忍に血を与えて高い再生能力を以て、腕を繋げて見せた。

血を吸うという普通の人間ではあり得ない行為、腕を手術も無しに繋げるという能力等、恭也はソレらを目にしていた。

例えば、昔さくらが真一郎にしたみたいに、軽く切った指を舐めて血を飲んだ程度であれば、幾らでも誤魔化しが利く。

例えば、軽い切り傷程度なら翌日完治しても、ちょっと常人より治りが早いと言って誤魔化せる。

しかし、実際に大量の輸血をして腕を繋げ、ソレを行ったノエルは、然もそれが普通だと云わんばかりにやって見せた。

因みに、恭也は血を抜き過ぎてフラフラになった。

その後、採り過ぎた血を忍は恭也に供血で返す。

それから恭也は聞かされる事になる。

【夜の一族】の存在と掟について……

掟とは、一族の秘密を知った者に一つの決断を迫るものだった。

記憶を消して一族の秘密を忘れるか、若しくは一族に近しい者となって共に秘密を守る側となるか。

相手を決して裏切らない、そんなパートナーに等しい関係。

それは普通に友達でもいいし、もし異性なら恋人になってもいい。

「まあ、同性で恋人には成れないし……異性でも別に恋人が居た場合は……ね」

何だかさくらが淋しそうな表情になったが、直ぐ居住まいを正して話を続ける。

恭也は既に忍とはそれなりに仲も良く、他に恋人が居た訳でもなかった事から、秘密を共有してずっと傍に在り続ける事を誓う。

【契約】して恋人として、忍を護る事を……

もしも恭也が、契約をしなかった場合は記憶を消す事になったし、忍も恭也と深く関わる事は無くなっていた筈だ。

しかし、太一の場合契約はしないし記憶も消させないと言った為に、ややこしい事態になってしまった。

さくらが出張って来たのはこの事態を収拾する為。

「まあ、取っ掛かりとして私の事を教えましょう。貴方の事はある程度識っているけど、貴方は私の事を識らないでしょうし……」

「普通、其処は月村の事を教えませんか？」

「すずかの事なら仲良くなって、本人に聞くべき」

太一は納得して頷く。

「で、貴女の事を教えてから雁字搦めにしようと？」

「クス、さあ？」

太一は苦笑し、それと同時に微笑んだ顔を見て綺麗だと思った。

さくらは軽く自分の事を教える。

私立風芽丘学園に通っていた事、朝が弱い事、図書委員だった事、先輩の事等。

「先輩が私に絡んで来た男子生徒に、ガラの悪い男を演じて追っ払ってくれた」

楽しそうに話す辺り、大切な想い出か何かだろう。

「そういえば、忍も恭也君にそんな役割を貴方に対してする様に頼んだらしいけど……まさか恭也君を相手にして同じ事をして返すとはね」

「ま、お互い演技が過ぎましたけどね」

肩を竦める太一。

「元々、私はあまり喋る方じゃなかったから、断るのが難しくて……」

さくらとしては自分を本当に好きな人が何人居るのか判らず、それ

なのに偉そうに恋をしている振りをして近付かれても迷惑なだけでしかなかった。

「私（夜の一族）の事を何も識らないクセに……ね」

其処にあったのは嫌悪感。

「全く、どうせ綺麗な子を侍らせたいとか、ヤりたいとかならそう言えばいいのに……」

間違ってもさせる気は無いけど……と付け加えたが。

薄い微笑みを魅せながら。

更に、これは賭けに等しかったが、太一が本当に夜の一族の秘密を守れるかを試す為、自身のもう一つの姿を見せた。

「……ピンクの犬耳と……尻尾？」

太一はソレを見て思う。

「（人狼とか言っても、ワーガルルモンに比べりゃ、人間と変わらないよな）」

吸血種にしてもヴァンデモンと比べていた。

寧ろ、今のさくらは可愛らしいくらいだ。

太一はピコピコと動く耳を思わず撫でる。

「ひゃん！？」

太一の手の感触を敏感に感じたのか、ビックリした様な悲鳴を上げるさくら。

「ご、ゴメン……痛かったのかな？」

「ううん……寧ろ……」

さくらは、紅潮させながらしどろもどろに答えた。

少し間を空けて……

「さて、私の事を識って貰った処でＯＨＡＮＡＳＨＩをしましょうか……」

真面目な話に入った筈が、今の言葉は少しニュアンスがおかしかった気がした。

構わずさくらは話す。

「先ず、記憶を消す選択は無い……？」

「無いですね」

「それは……何故？　煩わしいと思うなら、いっその事忘れた方が簡単だと思うけど……」

「これは矜持みたいなモノです。事故での不可抗力ならともかく、自ら忘れるなんて選択肢を選ぶのは自分に対する最大の侮辱。決して選んではならない禁忌なんですよ」

さくらは太一の瞳から、本気の光を見る。真っ直ぐ、自身の信念を決して違えない……本気の瞳だった。

「なら、契約をしたくないのは……何故？」

「いや、しても構いませんよ？」

「……は？」

意外な太一の返答を聞き、さくらは呆然となる。

「ただ、その場合は月村の望んだ形には絶対になりませんがね」

「成る程……」

詰まり“良いお友達”にしかならないという事だ。

答えを半ば後らせてまで今の状況を作った理由の一つに、この事を伝えられるだけの相手を引っ張り出す事にあった。

あの時は妥協点としてあんな答えをしたが、理由としてみれば薄い。

それに“聞いておきたい事”も在ったし。

さくらとしては、これで簡単に答えを引き出せなくなったと言える。

太一が今、この瞬間に契約を受ける事は即ち、すずかの望む答えが永遠に手に入らない事を意味していた。

一族を思うならすずかの想いなど放っておくのだが、さくらにも思うところが在ったし、太一が真っ直ぐに自分達に向き合っているなら取り敢えず問題無い。

「裏と闇……」

「ッ！？」

「組織は人、人が集まり組織は出来る。組織が出来れば自ずと人には役割が与えられる。例えば分かり易い処でリーダーとサブリーダーの存在。リーダーが組織を率いて、サブリーダーがその補佐役を務める。

そしてその組織の中に在っては、裏を引き受ける存在も必要不可欠だ。

組織を維持して護っていくその為に。

太一もだからこそ裏の存在は必要悪と考えているが、組織の闇は決して在ってはならないと思っている。

裏の裏の更にその影に隠れて、己が欲望の苗床とする“闇”の存在を。

月村や綺堂も夜の一族という“組織”だと言っても過言ではない。

一族というのもまた、人の集団に他ならないからだ。

当然ながら裏も在れば闇だって在る。

最近で云えば安次郎の一件が、一族の闇だろう。

まあ、本末転倒な上に自業自得な結果で自滅したが。

自動人形数機を動ける様にする金が在るなら、それで財テクでもすれば良いものを、金は失うはイレインには裏切られるは、大怪我はするは散々な目に遭った。

今回は関係無い為、詳しくは省くがイレインは自動人形で、去年の一件で恭也達と戦っている。

それはともかく、太一が知りたいのは“契約”に纏わる裏と闇だ。

さくらが正直に話すか否かも判断材料となる。

さくらは太一を試している心算だろうが、太一もまたさくらを試していた。

「さくらさんは一族が成立して、何百年経っているか識ってますか？」

「？　識らない……資料も散逸していて、もうどのくらい昔だったのか……それが？」

「正体を知られたら、記憶を消すか身内になるか……倫理観も無かった昔からの掟にしては……温い。

昔はもっと違う内容だったんじゃないかなってね」

さくらは目を見開いて驚愕する。

目の前の少年は本当に子供なのかと思うくらい、組織の裏や闇の深淵を識っているのかも知れない。

そう思った。

ただ、諜報からの報告を聞く限りでは、八神太一は闇は疎か裏とも全く関わりが無い。

実の両親を事故で失って、父親の従兄弟筋だった義父に拾われ、その後義理の両親も事故死。

事故も完全に偶発的であり今は、再従兄妹(はとこ)に当たる少女と義兄妹として暮らしている。

何も出て来なかった。

だから一日で調査も終了。

正味、半日掛からなかったのだ。

「(もしかして、早計……だった?)」

調査は打ち切ってある。

さくらは背筋に冷たいモノが奔るのを感じていた。

「倫理観の薄い昔なら、もっと直接的に……」

「ええ……そうよ」

肯定するしか無い。

「だけど時代が進むにつれて、ソレは現実的に難しくなった。だから生命ではなく記憶を消していた。それこそ問答無用で……ね」

しかし、更に時代が進んで転機が訪れた。

正体を知られた男に一族の娘が恋をしたのだ。

記憶を消されれば男は娘を忘れてしまう。

だから男にある契約を持ち掛けた。

娘と夫婦となり、一族の身内となって秘密をその生命に賭けて生涯守り抜けと。

男も娘を愛しており、この時掟の中に契約の概念が出来た。

こうやって掟は、時代と共にまるで緩和されていくかの様に変わっていく。

時代を生き延びる為の英断だったとも言える。

もしも掟をただ強行したなら、内部から崩れ兼ねなかったのだから。

話を聞いて満足したのか、太一はコクリと頷いた。

「俺にも秘密にしている事が在る。だけど話すなら、自分の意思で。それが俺の自らの選択……」

それでも……

「さくらさんは自分の事まで話してくれたし、月村達には内緒にしてくれるなら話しますよ、俺の事を」

話したのは転生者であり、嘗て別の平行世界で生きて裏や闇とやり合っていた事や、その世界で人間とは違う知性体とコンタクトしていた事。

裏付けが取れないし、証明の手も無い口だけの説明。

しかし、これならさくらも太一がまるで同年代に感じた理由が分かる。

それに太一が霊能者や妖狐やＨＧＳ、人狼に吸血種といった存在に理解があるのも頷けた。

こうして2人はある意味で秘密を共有する事になる。

すずかとは取り敢えず……

「契約云々はともかくとして、友達になろう。だから先ずは名前で呼び合う事から始めようか“すずか”」

「は、はい！“太一先輩”」

月村ではなくすずかと……

八神先輩ではなく太一先輩と……

小さな一歩だけど、確かな一歩を。

しかしただ一つだけ……

「太一君……か……中々良い男になるかしら……

一族に彼を引き入れるだけなら、別にすずかが相手でなくても……

ね」

「へ？」

さくらがボソリと言い放った言葉を聞き、忍は冷や汗を流しながら

心の中で忠告を入れた。

「（すずか、頑張って彼を堕としなさい……）」

さもないと、いつの間にかさくらに持って行かれてしまう羽目になる

るからと。

.

第7話：和解に向けて（後書き）

一族の昔の話云々は飽く迄も二次設定です。
後、契約しても結果が一緒だとは思わないで下さい。

神無鴇人さん、蒼き星さん、感想をありがとうございます。

次回
第８話：いざ高町家へ
無印編が、次回から始まります。

第8話：いざ高町家へ（前書き）

無印編に突入しました。

第8話：いざ高町家へ

・

少年が居た。

くすんだ金髪を短く刈った少年は、小さい赤い宝石を手に口訣を唱える。

「妙なる響き、光となれ！
赦されざる者を封印の輪に！」

ヌメヌメとしたヘドロの様なモノが、かなりの速度で近付いて来ている。

しかし、少年は逃げ出す事も無く果敢に口訣を紡ぎ続けた。

「グオォォォォオッ！」

ヘドロは飛び上がり、少年に襲い掛かる。

「ジュエルシード……封・印！！」

口訣を唱え終わると、宝石が光り輝き薄い翠の魔方陣が前方に顕れた。

それと同時に魔法陣にヘドロが衝突する。

その瞬間、眩い光を発するとヘドロが弾き飛ばされ、ビチビチャと

気味の悪い音と共に砕けた。

「グッ…オォォ…」

深手を負ったヘドロは、腐臭を放ちながらその場を去って行った。

「っ！　逃がし……ちゃった……」

少年は肉体的、精神的疲労によりその場に崩れ落ちてしまう。

「追いかけ……なくっちゃ……っ！」

何とか起き上がってヘドロを追跡しようとするが、最早動けず倒れ臥す。

……誰か、僕の声を聴いて……力を……貸して……

少年は最後の力を振り絞って、誰かに助けを求める。

……魔法の、力……を！

少年は淡い翠色の光に包まれると気を失う。

光が収まると、其処に少年の姿は無く一匹の小動物が横たわっていた。

少年が持っていた赤い宝石を首に提げて……

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「何だか凄い夢を視たな。
しかし、あの少年が戦っていた怪物……アレって確かレアモンじゃなかったか？」

【Ｄｉｇｉｍｏｎ　Ａｎａｌｙｚｅｒ】
レアモン

属性：ウイルス種
世代：成熟期
種族：アンデット型
全身の筋肉が腐り落ちたアンデッド型デジモン。
体を機械化することで生き長らえようとしたが体が安定せず、体を構成するデータが崩壊し始めている。
必殺技は口から吐き出す【ヘドロ】と【臭いガス】と【メタルガス】

太一は首を傾げながらも起き上がり、何時ものトレーニングを開始する。

前世の記憶が戻ってから、嘗ての裏や闇と戦い始めた頃からやっていたトレーニングをしていた。

幾ら身体能力が前世から引き継がれているとはいえ、動かしておかないといざという時に動けないし、衰えもするからだ。

トレーニングを終えると、太一はストレッチをこなして家に入っていった。

「あ～、太一兄ちゃん。
朝ご飯出来とるよ～」

あの激動から結構経つ。

４月２４日、太一が裏に手を染める一因となる事件が幕を開けようとしていた。

はやてに出迎えられ、朝食を摂ると学校へと向かう。

何時もの日常……

しかし日常と非日常が直ぐに交叉する事になるとは、この時の太一は全く気が付いてはいなかった。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

【聖祥大付属小学校】

昼休みになって、太一が義妹特性の弁当を開こうとすると、クラスメイトの女子から呼ばれる。

下級生の娘が太一を呼んでいるらしい。

「誰だ？　って、すずかとバニングスと高町だよな」
思い当たる節が有る為か、廊下まで出てみればアリサが腰に手を当てて踏ん反り返っている。
その後ろには、オドオドと挙動不審なすずかが隠れる様に立っていた。
「3人共、どうしたんだ？　こんな昼休みに。弁当はもう食ったのか？」
「八神先輩っ！」
「……？　どうしたんだ、バニングス」
不穏な微笑みに、若干引きながら訊ねる太一。
「仮にも恋人に成る成らないの話をした“友達”を放ったらかして教室でお弁当は無いんじゃないですか？
“友達”とお弁当なんて、学園生活では当り前ですよねっ！？」
流石に行き辛いので、毎度同じ事を言われている。
「わ、判ったから我鳴るなよ……確かに配慮に欠けてたな」
若干引きつつ太一は弁当を持って教室を出る。
この二週間と云うもの、こんな感じで屋上に上がっていた太一。
勿論、男子生徒からのやっかみの視線はあったが。

幼稚園の頃ならともかく、この頃ならアリサの容姿は特異なモノではない。

アリサレベルの娘からのお誘いを受ければ、やっかみの一つも受けるだろう。

屋上に上がって弁当を食べる４人。

「太一先輩のお弁当って、はやてちゃんが作ってるんですよね？」

「ん、ああ。俺はこういうの出来なくてな。いや簡単なモノなら出来るんだが、前にはやてから『太一兄ちゃんのお弁当は、お弁当に対する冒涜や！』とか言われてな～」

すずかに問われ、太一は苦笑しながら答える。

太一とて簡単な料理くらいは出来るし、弁当など作った料理を弁当箱に詰めるだけと高を括っていた。

しかし、考えの無いレパートリーに彩りを考えていない詰め込みと、はやてから見れば看過出来ないお粗末な出来。

結果、自分で作る事を禁止させられてしまったのだ。

流石にへこんだが、言われた通り現在ははやてに任せている。

「少なくとも、八神先輩は料理人には向かなかったって事ですか……」

「？　どうした？」

アリサに訊ねると、今日の社会科の授業で働く親について話があって、将来自分がどんな職業に就くのかを考えたらしい。

「将来の夢……か」

太一にとってはある意味で難しい話だ。

前世の今頃ならプロサッカー選手とでも答えたかも知れないが、今生でサッカー選手等とは考えられない。

とはいえ、生きる為には必ず組織に属する必要があるし、何時かは考えなければならない事。

組織に属するか、組織を創るか……何れにしても人間である以上は人間の集団の中に在るしかない。

「（俺は……どうするかな？）」

そんな事を考えていると、３人は盛り上がっていた。

「アリサちゃんとすずかちゃんはもう結構決まってるんでしょ？」

「でも、全然漠然とよ。
パパとママの会社経営（お仕事）一杯勉強してアタシもやれたら良いなって……それくらいだし」

栗色でツインテールな髪の毛の少女に答えるアリサ。

「私もだよ。ぼんやりとだけど『出来たらいいな』って思ってるだけ。機械系とか工学系とか好きだから、そういうのが出来たら嬉しいな……って」

「そっかぁ、二人とも凄いねぇ」

アリサはそんななのはに、泰然とフォローをする。

「でも……なのはは喫茶【翠屋】の二代目かんじゃないの？」

「う～ん……それも将来のビジョンの一つではあるんだけど……やりたい事は、何かある様な気はするんだけど、まだそれが何なのかハッキリしないんだ」

なのはは俯き、自嘲気味に呟く。

「私、特技も取り柄も特に無いし……」

「巫山戯るなっ！」

突然響いた大声に、少女もレモンの薄切りを振り被っていたアリサも驚いて止まってしまう。

「君はソレを言えるだけの努力をして来たのか！？
まだ何も探さない内から諦めるのか？　君の全ては未だに始まってすらいないってのにっ！」

「そうだよ、なのはちゃんにしか出来ない事はきっとあるよ！」

呆然となるなのはに対し、太一は捲くし立てる。
まだ若いなのはが諦めた様な、そんな事を言って欲しくはない。
すずかも心配そうに言う。
「大体アンタ、理数の成績はこの私より良いじゃないの！　それで取り柄が無いとか、どの口が言ってるのかしらねぇ！？」
アリサはなのはのバックを取り、口を目一杯広げながら説教をする。
「ら、らってなのは……！
ふん系苦手らし！　運動らってれきらいひ！！」
何を言っているかは聞き取れないが、何を言いたいのかは解った。
太一にも覚えはある。
もう、ずっと……
そう、随分と昔の事だ。
太一は苦笑しながら言う。
「まだ君は小学生に過ぎないんだ。この頃の子供の持つ夢なんて、理想と現実の区別も無い事ばかりだ。
難しく考えても仕方がないんだよ……」
諦観にも似た言葉を聞き、アリサも手を停める。

3人の心はきっとこの時、一つになっていた。

『なんて子供らしくない』

今ならきっと某・三つの心が一つになれば百万パワーのマシンにだって乗れる……わけないが、主に身長と体力的な意味で。

とにかく、一つになっていた。

昼食後、4人は別れて教室へと戻る。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

【放課後】

すずか達に誘われて、一緒に下校する太一。

他愛ない話に花咲かせていると、破壊された公園の一角に警察やら関係者らしき人間が動いていた。

話を訊くと、昨夜の内に壊されたらしく被害の大きさから、警察に来て貰ったらしい。

なのはがうろうろしている中、太一は昨夜の夢で此処を視た事に気が付く。

キョロキョロしていると、突然太一の脳裏へと軽い衝撃が奔る。

攻撃的なモノではなくて、まるで頭骨に直接振動を起こして電話でもするかの様な、そんな振動……

振動は微かな、しかし確かな“声”となって響く。

〔タスケテ……〕

念のため、周囲の気配を探るが切羽詰まった気配は感じられない。

そんな事をしていると、行き成りなのはが林に向かって走り出す。

驚きながら太一達はなのはの後を追った。

追った先には、小動物を抱き抱えたなのはが立ち尽くしている。

「なのは、その子……？」

「怪我……してるみたい」

アリサに問われたなのはが答えると、すずかが心配そうに覗き込む。

太一は3人から離れた位置で、携帯電話を取り出すと何処かへ電話をする。

「はい、多分イタチか何かだと……判りました。

それでは失礼します！」

「太一先輩、こんな時に何処に電話を？」

「こんな時だからこそだ。
槇原動物病院に連絡を入れたから、連れていくぞ。
あそこの院長先生の愛さんは、腕が確かだからな」

「あ……」

自分達が浮足立っている時に、連絡をしてくれていた事に驚くと同時にハッとなるすずか。

確かに予め連絡をしておけば、万端の準備が可能だ。

後は受け容れ態勢の整った病院へ連れていけば良い。

太一も同じヘマをする気は無かった。

あの時、もしも連絡先の番号を聞いていれば、危ない橋を渡る必要は無かったかも知れない。

だから今回、連絡をきっちりしておいたのだ。

４人が立ち去ると、ソレを影が見据えていた。

影の傍には菱形の碧く輝く宝石が一つ、地面に転がっている。

影は這い擦りながら宝石を取り込んでしまった。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

治療は普通に終わり、太一達は小動物を見ていた。
包帯を胴体に巻き付けてあるのが痛々しい。
「怪我はそんなに深くはないけど、随分と衰弱してるみたいね……」
手を洗いながら院長である槇原　愛は話す。
「「「ありがとうございます！」」」
「い～え～」
3人娘の言葉に、愛は返事をしながら診察台に戻る。
「ありがとう愛さん」
「気にしないで、私はお仕事をしただけよ太一君」
「へ？　太一先輩と槇原先生って知り合い？」
何だか親しげな2人を見てすずかが訊ねた。
義父と義母が事故で死んでから、ちょっとした縁もあって一昨年までさざなみ寮という名の“女子寮”で、太一ははやてと共に世話になっていた。
その為、あそこの住人達は太一の知り合いだ。
女子寮という事もあって、6～9歳までで既に精神年齢が18歳前後だった太一には、目の毒な事も多々在ったものだった。

太一は当たり障り無い話をすずか達にしておく。
主に目の毒だった部分は、意図的に伏せて話した。
アリサが暴れそうだし……
一応、納得はしてくれたみたいだし、愛も嘘を言った訳でも無い為苦笑しながら頷いてくれる。
話は再びイタチ？　に戻って、会話が続く。
「この子、フェレットですよね？　何処かのペットなのかな？」
アリサの問いに、愛は顎に手を添えながら答える。
「フェレット……なのかな？　変わった種類だけど」
フェレット？　を見る3人娘達……首に掛かった赤い宝石が煌めいた。
「ま、暫らく安静にした方が良さそうだから、取り敢えず明日まで預かっておこうか？」
「はい！」
なのはを中心に、3人娘は顔を見合わせると笑顔を浮かべて応える。
「「「お願いします！」」」

改めてお礼を言うと、４人は動物病院を出た。

「あ、八神先輩」

「どうした、高町？」

「お兄ちゃんがお姉ちゃんの出来を見てくれないかって、八神先輩を呼んでましたけど……」

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

４月１４日の事。

綺堂さくらとの一件以来から数日後、恭也から誘われたのだ。

「太一、ヤらないか？」

その瞬間、太一は盛大な勢いで恭也から離れ、すずかとさくらがガードをして、忍が恭也を引っ掻いた。

「スマン、言葉が足りなかったな。一つ“模擬戦を戦らないか”と言いたかったんだよ……」

顔に引っ掻き傷を幾つか作った恭也が、謝りながら正しく話す。

喫茶翠屋で約束通り食事をしていて、恭也からの突然の誘いだった。

因みに、はやては恭也の発言を聞いて目を輝かせていたが、誰も気

が付かない。

こうして、食後の腹ごなしも兼ねた模擬戦が始まる。

高町家にはそれ程大きい訳でもないが、母屋以外にも庭に道場が在った。

太一と恭也の2人は向かい合って立っている。

恭也は訓練の時に着ている服装、太一は剣道着に身を包んでいた。

「君は剣道をしているのか？」

「俺の後輩に剣道をやってる奴が居て、後輩の祖父に一応基本的なところを教えて貰ってたんですよ」

嘘ではない。

“前世”に於いて、裏へと本格的ぬ関わる様になった頃、アグモン任せにしておけず戦い方をマスターする為に、火田伊織の祖父の下へ剣道を教わりに行った。

今でもその頃のトレーニングは欠かしていないから、あの頃と同じ……否、身体能力が上がった分あの頃以上に動ける筈だし、神？から教わった体術もある。

「なら木刀を貸そう」

「いえ、要りません」

「！？　そうか……」

一瞬、恭也は驚きから目を見開いたが、太一の目の輝きに曇りは無く、今からの戦いに目を向ける戦士の目を見た。

その目に、父である士郎や父の妹……伯母の美沙斗と同じ輝きが在ったのだ。

正しく戦闘者の瞳。

成る程……あの時倒す為に放った一撃を、受け止めたアレは偶然だの運が良かっただのの話では無く、完全な実力だったのだと恭也は今こそ理解した。

相手が９歳は下の子供だと侮れば、逆に喰われかねない相手なのだと。

飛針やワイヤー等は無し、小太刀の長さの木刀を二本手にした恭也。

そんな恭也に対して、無手の太一。

「それじゃあ始めるか……

『永全不動八門一派・御神真刀流、小太刀二刀術』……御神裏、不破流剣士。

高町恭也、推して参る！」

「我流、八神太一」

「「いざ、勝負！」」

第8話：いざ高町家へ（後書き）

無印編に入った筈なのに、なのはが魔法と未だ出会わない……

しかも暫らく空気だし。

次回はバッチリ戦闘もこなしてくれますが。

蒼き星さん、皇　翠輝さん、神無鴇人さん、感想をありがとうございます。

次回

第9話：碧い宝石

宜しくお願いします。

第9話：碧い宝石（前書き）

漸くジュエルシードが絡んできました。

第9話：碧い宝石

・

機先を制したのは恭也。

恭也の木刀が太一の腹部を捉える。

しかし太一は木刀の中央に膝蹴りを当て自分から逸らすと、追撃とばかりにそのまま右脚で回し蹴りを恭也へと放った。

恭也はソレを軽いバックステップで躱すと、左手の木刀で薙ぎ払う。

「チッ！」

この程度で当たるとは考えなかったが、流石に舌打ちするとジャンプ一番躱してそのまま飛び蹴りに繋ぐ。

右手の木刀で防ぎつつ身体を捻って躱した恭也は、一気呵成に四連撃を放った。

―小太刀二刀御神流―

『薙旋』

「ハァァァァァァッ！」

太一もまた、その瞬撃４つを悉く躱した。

２人はそのまま相手の間合いから離れ、警戒態勢のまま一度息を吐

く。

「やるな、太一！」

「貴方も……流石だね！」

今の僅かなやり取りだけで理解できた。

太一は恭也の剣の腕を。

恭也は太一の能力が、謎の力に頼り切ったモノでは無い事を。

「どうやら君には御神の剣士として、最高の力で臨まなければならないらしい」

グッと腰を落とし、構えた恭也は太一の視界から一瞬で消え失せた。

「アレは！？」

美由希も識っている。

ソレが何なのか兄から教わっているし、兄が使った所を何度か見た。

この一年、修業して手応えこそ感じているものの、未だに到達し切れてはいない御神の技……

去年の美由希の実母である美沙斗とのあれこれで、既に最後の奥義に到達している恭也。

未だに士郎が怪我を負った際にやった昔の無茶で、壊した膝が完治

してない恭也では回数、時間と制限も厳しいとはいえ、かなりの完成度で使える。

それが……

ー小太刀二刀御神流　奥義の歩法ー

『神速』

一般人の目には消えたとしか映らないだろうこの技、太一もそれは同じだった。

太一は明らかに追い付いていない。

見失った事実だけがあり、恭也と太一の彼我時間差の所為か未だに捜す素振りすら無かった。

「（貫った！）」

完全に背後を取った恭也が太一へと攻撃を繰り出し、恭也は捉えたと確信する。

『神速』とは、御神の技の一つ『貫』の先に在る技。

極端とも云える程の集中により、思考をクリアにして意識を拡大化。

脳に働き掛け、色彩の無いモノラルな世界へと突入をする。

当然、今の恭也の視界には色が失せており、白黒だ。

思考が、意識の拡大化に伴い加速……高速化している為、周囲の動きは緩慢となって銃弾すら見切れる程の速度に見える。

しかし、それは自分の動きも同じ事だ。

まるでタールの海に潜ったかの如く空気がズシリと重くなり、動きが鈍る。

意識の先鋭化で見える銃弾も、それより鈍化している自分の身体では避ける事も叶わないだろう。

意識ばかりが先に行って、身体が追い付いてこない。

『神速』は更にこの先……肉体に掛かるリミッターを解除する事で初めて“発動”したと云えるのだ。

１００ｍを６秒台で駆け抜けるチーターより速く奔れたとしても、その先に到達する事は難しい。

鍛えても、それは飽く迄も表の肉体を鍛えているに過ぎず、常にその先には到達出来ない。

簡単に云えば、１の力の時に１０の力をリミッターの解除で出せたとして、１０の力に到達した時のリミッター解除では１００になっていると云う事。

人間の身体には、常にリミッターが掛かっている。

そのリミッターを恣意的に解除する事、それによって意識と肉体の間に出来ている齟齬を解消し、あり得ない程の速度を出す。

肉体の限界（リミット）を常に越え（ブレイクす）る技、身体に……特に神速を支える下半身に欠陥を持っている恭也に制限が在るのは、寧ろ必然だろう。

「小太刀二刀御神流裏……奥義の参！」

恭也は高速の突きを放つ。

―小太刀二刀御神流　裏―

―奥義の参―

「『射抜』！」

『射抜』は打ち放った先から自在に派生する技。

『射抜』から攻撃を派生させたモノを『射抜・追』と云う。

今回恭也が放ったのは、通常の『射抜』。

『神速』の中の高速。

しかし太一は瞬間的に振り返ると、蹴りで木刀を止めて受け流す。

「な……にっ！？」

驚愕に目を見開く恭也。

『神速』は正に目にも写らぬ速さで動く技。

その加速領域に在って見た太一の様子は、全くと言っていい程に反応出来てはいなかった。

それなのに今、太一は間違いなく攻撃を受け流したのだ。恣意的に。

だが驚愕してばかりもいられない、戦闘は未だに続行中なのだから動かなければ倒されるのは自分。

恭也は再び『神速』の領域に入ると、太一の死角から攻撃を仕掛けた。

―小太刀二刀御神流―

―『虎切』―

抜刀技の為木刀では向かない技だが、遠距離から一気に斬り付ける技という性質上、気配を察知しても間合いを取り難い筈……

感じた時には遠距離で届かず、気が付けば接近しているだろう此れならと放つ。

やはり太一は反応をしていない。

届いた時には終わる。

恭也の持つ木刀が太一を捉えた……

そう思った瞬間、太一がカウンターの蹴りを恭也へと放っていた。

その太一の唇が動いているのを見て、恭也は動きを読み取ってみる。

【火燐】……

そう口にしていた。

恭也は太一の技を何とか回避するが、それにより『神速』も解除されてしまう。

2人共、動きっぱなしの為かそろそろ息が上がり始めている。

「ハァ、ハァ、太一、お前……もしかして見えているのか？」

「まさか？……全く見えなくて困ったよ」

太一に『神速』は見えてはいない。

『神速』を視るには『神速』と同様の技術を持たなければならないのだ。

そして太一には『神速』を使う為の知識が無い。

身体は作られているから、後は知識と技術が有れば良いのだが……

「ならどうやって『神速』の領域に居た筈の俺の攻撃を防げた？」

「『神速』だって人の技。

決して万能じゃないさ」

「成る程……な」

模擬戦とはいえど、現在は戦闘中だ。
ペラペラと自分の手札(カード)を晒す気は無い。
「なら、戦闘後にディスカッションといくか！？」
「了解！」
恭也の木刀と太一の蹴り、それが交叉した。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

4月24日
いつもの通り、はやてと共に翠屋へ行って食事をした後、高町家へ向かう。
何故かアリサとすずかは疎か、さくらまで付いて来てしまった。
高町家に着いた太一達。
早速、道場へと向かう。
「来たか、太一」
恭也とトレーニングウェアに身を包み、メガネを外した美由希が待

っていた。

「なのはに伝言させておいたから聞いてるだろうが、今日は美由希の出来を見るのに軽く戦って貰えるか？
父さんの許可も降りてるからな、遠慮無くぶっ飛ばしてくれていい」

「ちょっ！？　恭ちゃん！」

あまりに物騒な事を言ってくれる兄に、抗議の目を向ける美由希だったが、当の恭也は平然と言い放つ。

殆んど涙目だ。

「なぁに、やられたく無いなら逆に倒せばいい」

「出来る訳がないよ～！
恭ちゃんとガチに戦って、それで“引き分けた”相手と～！」

最終的にはお互いの体力の限界を見極めた士郎が途中で止め、引き分けと云う事で決着を見た模擬戦。

それ以来、太一は高町家に行って訓練をしている。

『神速』を盗む為にだ。

本来は御神流と不破流の技であり、赤の他人に教える技では無いが共に訓練をしていき盗む分には良いだろうと士郎は言った。

どの道、御神正統は美由希だけしか遺って居らず、裏の不破も士郎と士郎の妹の美沙斗と恭也しか居ない。

細々と生き延び、何れ子孫の選択次第では消え逝くだけの“技術”であるなら、教えはしないが視て、盗見取るなら咎めはしない。

そういう事らしい。

そして、美由希の出来を視る為の模擬戦は……

始終、太一の優勢で進んで終わってしまった。

「ふむ、まあ今の美由希ならこんなものか？」

それでも『神速』の前段階の『貫』は修得済み。

恭也との戦闘で一度視ていなければ、ダメージを受けていたかも知れない。

太一は恭也の『貫』を防御しようとして、直ぐに回避へと切り替えた。

それは直感。

頭の中で無意識が叫んだ、『避けろ』決して『受けようとするな』と。

しかし、既に受けの動作に入っていた太一は、無理に避けの動作に入った所為か避け切れず、頬を擦る。

美由希とは初めから避けた為、擦りもしなかった。

そう、直感。

言い換えれば第六感。

シックスセンスだ。

人によっては只の勘と切って捨てるが、太一に武術を伝えた神？は先ず最初に此れを伝えた。

高速戦闘に於いて勘に頼るのは危険だと教えた者も居るし、神？もその事は知っている。

が、それは本当に勘だから危険なのであって、第六感にまで昇華されたソレは勘とはまた異なっていた。

世界とは何か？

世界とは即ち、情報だ。

人間の肉体もＤＮＡという情報で構成された情報体。

その情報に沿って蛋白質が配列され、電気信号という情報が動かしている。

全てが情報だと云うのであれば、電子情報だけの生命であるデジモンとどれだけの差異があるのか？

なら、その情報野を感じ取る部分が先鋭化されたら、どれだけの事が可能か？

五感で世界の情報を感じ、無意識で情報を整理計算を行う。
その結果を脳が受け取る事で、計算結果に基づいた行動を採る。
第六感のそれがシーケンスで、量子のレベルでそれら全てが行われていた。
太一が教わった武術はその全てが情報を基点としており、その為肉体さえ付いて来るなら技は使える。
初めは基礎中の基礎として第六感を、それが始まりの修業だった。
恭也の『神速』に反応出来たのも、直感……第六感に拠るもの。
見えてはいなくても、依然として在るなら、攻撃を放つ瞬間を掴んで避けたり、ガードは可能となる。
勿論、身体が反応出来ればの話だが……
『神速』には遠く及ばないとはいえ、速度に関しては一家言ある武術。
四天志真流・基本体術……【神風】
太一が現在使用可能な技では最速で、最高のモノ。
【泰山】【流水】【火燐】【神風】【闇天】【瞬光】【刹那】【無限】【零覇】
九つから成る基本体術。

その組合せの応用体術。

更には秘技の数々。

全ては使えない太一だが、一瞬だけなら……『神速』からの一撃を止められた。

その結果、恭也も太一も心身共に疲れ果ててしまい、士郎が模擬戦を止めた方が良いと判断したのだが。

美由希相手ではその必要が無かった。

美由希も弱く無いが、未だに完成していない剣士。

御神の正統を継ぐ剣士として大成すれば、恭也さえ凌ぐとしても今は……

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

その後……

今晩は元々、泊まるという話になっている。

太一が風呂に入っている間に服を洗濯し、乾かす。

翌日の時間割の準備は一度帰った際に終わり、持って来ている。

一頻りみんなで騒ぎ、夜中になったら眠る……

……筈だった。

〔聞こえますか？〕

あの“声”が響く。

「グッ……ッッ！」

未だに慣れない感覚。

頭の中で直接振動を響かせた様な“声”……

そうとしか形容出来ない。

〔僕の声が聞こえますか？　聞いて下さい。僕の声が聞こえる方、お願いです……力を貸して下さい！〕

一方的に響く“声”。

「よく判らないけど、誰かが助けを求めてる？」

そんな“声”が響いてくる中、勢いよく扉が開け放たれて恭也が入ってきた。

元々恭也の部屋なのだから恭也が入ってくるのは良いとして、少々慌ただしい。

「どうしました、恭也さん？」

「アリサちゃん達から聞いたんだが、なのはが行き成り部屋を飛び出して外に出てしまったらしい。
俺は捜しに行こうと思うんだが、太一も手伝って貰えないか？」

「！　判りました」

太一は考える。

あの“声”が響いたのと同じ頃、なのはが出て行ったという事は……

「（高町にもあの“声”が聞こえていたって事になるな……）」

そういえば、あの“声”と共になのはが林に入り込んでフェレットを見付けた。

詰まり……

「（あのフェレットが“声”の主で、他の人間に聞こえていそうに無い“声”を俺と高町が聞けた……）」

“声”を聞くには何らかの条件を満たさなければならない。

「恭也さん、心当たりがあるので其処へ行ってみますから、みんなは待機しておいて下さい！」

「！？　しかし……」

太一の目を見た恭也。

相も変わらず強い輝きを秘めた瞳。

「判った、俺達は玄関で待っている。一時間経っても連絡が無ければ、俺達も捜しに行くからな？」

「了解！」

太一は部屋を出て、玄関に向かう。

「太一先輩！」

「八神先輩！」

「太一兄ちゃん！」

すずか、アリサ、はやてが待っていた。

「なのはちゃんをお願いします！」

「応っ！」

すずかに応え、太一は外に駆け出して向かう。

暫らく駆けていると、桜色の極光が天を突く。

「アレは！？」

考えている暇も無く、突然の襲撃を受ける太一。

「なに？」

夜の街灯に照らされたソレは、ヌメヌメとした腐肉に酷い悪臭を放つ。

「レアモン！？　しかも、何かデカイ？」

普通のレアモンの数倍の巨体に、鼻を突く異臭。

元が悪質なウイルスに感染したデジモンだけに説得は無理そうだし、デジタルワールドを開く術も現状では無い。

「悪いが、一気に征かせて貰うぞ！　デジメンタル・アァァァァップ！」

Ｄ－アカシックを掲げて叫ぶと、光が放たれて炎の束が太一を覆う。

「アーマー進化ぁぁっ！」

それは足、膝、腕、腰、胸に絡み付き、デジタルジャケットを形成していく。

「燃え上がれ、勇気よ！
フレイドラフォーム！」

後輩である大輔のパートナーデジモン、フレイドラモンを思わせる炎の紋様。

「ハァァァァッ！」

両拳に纏う炎を、正拳突きの要領で放つ。

「ナックル・ファイア！」

『ギュブブ……ッッ！』

怯んだレアモンの隙を突くと、太一は両掌に炎を収束し圧縮していく。

「ブレイズ・フォォォォォーースッ！」

圧縮された炎がレアモンを焼く。

放ったままの格好で息を荒々しく吐き、その場を見ていると、レアモンの周囲にデジコードが顕れる。

「自らを見失いし存在よ、我が勇気の焔で浄化する。
デジコード・スキャン！」

デジコードをなぞると、ソレはＤ－アカシックに吸収され、残るのはデジタマと菱形の碧い宝石。

「此れは……？」

Ｄ－アカシックの使い方は予め、あの日に大人はやてから聞いていたし、デジタマについても知っていた。

しかし、この碧い宝石については知らない。

太一が拾うと、Ｄ－アカシックから光が放たれ、宝石をモニターから取り込んでしまう。

「何が起こってるんだ？」

居ない筈のデジモン。

謎の“声”。

桜色の極光。

菱形の碧い宝石。

何かが起きている。

その時、遠くから桜色の光と共に爆音が響く。

「行くしかないか……」

太一は進化を解除すると、目的地へと向かう。

それを、影から見ている者が居る事には気が付かないままに……

影から観ていた者は、太一を見送りながら呟く。

「流石……だね……」

影の者は、ニコリと微笑んで去って行くのだった。

・

第9話：碧い宝石（後書き）

キャラの扱いやストーリーに関するバッシングには、一切お応え致しません。

キリが無いし、勘違いしたバッシングも多いので……感想や指摘とバッシングは別物です。
見たいキャラ付けや物語では無いのなら、わざわざ悪口を書かずに見たいモノを見に行って下さい。

蒼き星さん、感想をありがとうございます。

疑問、指摘、感想は受け付けておりますので、マナーを守ってお願いします。

次回
第１０話：魔導師
宜しくお願いします。

第１０話：魔導師（前書き）

今回はオリジナル分が少ないです。

第１０話：魔導師

・

太一がレアモンを倒す辺りから、少し時は戻り……

なのはは槇原動物病院に辿り着き、大変な状況に見舞われていた。

あのフェレットがヌメヌメとした、気味の悪い怪物に襲われていたのだ。

それは、太一を襲ったレアモンと同固体。

そして、現在は絶賛逃走中のなのはだった。

お喋りフェレットと共に。

「お願い、僕に……力を貸して。お礼は必ずしますから！」

「ハッ、ハッ、お礼とか、そんな場合じゃ無いでしょう！？」

フェレットを抱きしめたまま走るなのはは、息を切らせながらツッコム。

フェレットはなのはの腕から飛び出すと、詳しい説明を始めた。

「今の僕の魔力じゃ、アレは止められない。だけど、貴女なら！」

「魔力……？　どうすればいいの？」

聞き慣れない……否、ゲームなんかではよく出て来る単語ではあるが、現実では聞き慣れない言葉に訝しむなのは。

しかし、それでも説明を真面目に聞いた。

「これを……」

フェレットは首に掛けていた赤い、少し大きめのビー玉くらいの宝石を渡す。

なのはがソレを受け取ると説明を続けた。

「ソレを手に、目を閉じて心を澄まして……」

なのはは言われた通りに、目を閉じて両手で宝石を包み込んで心を澄ます。

「管理権限、新規使用者設定機能フルオープン！」

なのはの周りを桜色の円陣が展開される。

「あっ？」

「繰り返して。風は空に、星は天に」

「風は空に……星は天に……」

フェレットに次いでたどたどしく紡ぐ。

「不屈の魂（こころ）はこの胸に」

「不屈の魂はこの胸に！」

ドクン、ドクン……と宝石が脈打つ様に明滅する。

「この手に魔法を」

「この手に魔法を……！」

なのはは目を開き、赤い宝石を天（そら）に掲げた。

何時しか、２人の口訣は一つとなり……

「「レイジングハート、セェェェットアーップ！」」

《Ｓｔａｎｄ　ｂｙ　ｒｅａｄｙ.　Ｓｅｔｕｐ》

「うあ！？」

「な、なんて……魔力……」

なのはもフェレットもそれぞれ驚く。

なのはの身体は宙に浮き、桜色のリングが周囲を取り巻いていた。

《Ｗｅｌｃｏｍｅ　Ｎｅｗ　ｕｓｅｒ》

「え、あ……は、初めましてっ！」

赤い宝石に話し掛けられ、律儀に頭を下げるなのは。

《Your magic level……
qualifies you to use me（貴女の魔法資質を確認しました）》

明らかに日本語では無い筈が、何故か理解をしている小学三年生。

きっと頭の中に、翻訳された言語が入ってきているのだろう。

《May I select the optimum configuration for the Barrier Jack et and Device?（デバイス、防護服共に最適な形状を自動選択しますが、宜しいですか？）》

「えと……と、取り敢えず……ハイ！」

《All right. Stand by ready》

桜色の魔力光に包まれて、先ずは上着が消え、次いで下着が消える。

なのはがレイジングハートに口づけをすると、レイジングハートは赤い宝石の部分をコアに、フレームを形成していった。

なのはが【魔導師の杖】となったレイジングハートを手にすると、レイジングハートはバリアジャケットを生成する。

消えた服の代わりに、魔力で編まれた黒いアンダースーツがなのはの肢体をピッタリとフィットして包む。

金色の胸当てにT字のパーツが装着され、胸当てから下が白くなる。

白を基調とした更に上着が形成されると、ロングスカートが足腰を包んだ。

袖口に蒼い金属のパーツが装着される。

ブーツを装着し、ツインテールを纏めるリボンも魔力で編まれたモノに喚装されて、セットアップは無事に完了した。

「せ、成功だ！」

フェレットが、ガッツポーズを取りながら力強く言い放つ。

「え、えええっ！？」

自分の姿を見て驚愕してしまうなのはだが、レアモンが動き出してしまう。

「えええ～っ！？」

思わず空を飛んで逃げるが更に驚く。

《Ｈｏｗ　ｍｕｃｈ　ｄｏ　ｙｏｕ　ａｂｏｕｔ　ｍａｇｉｃ？（魔法についての知識は？）》

「全然！　全くありません！」

極一般人として生きてきたなのはは、ゲームならともかく現実に魔法の知識など有る筈も無く、レイジングハートに答える。

《Ｔｈｅｎ　Ｉ　ｓｈａｌｌ　ｔｅａｃｈ　ｅｖｅｒｙｔｈｉｎｇ.
Ｐｌｅａｓｅ　ｄｏ　ａｓ　ｉ　ｓａｙ（では、全て教えます。私の指示通りに）》

「は、はい！」

そうしている間に、飛び上がって来るレアモン。

《Ｆｒｉｅｒ　ｆｉｎ》

足に桜色の翼が生え、慣れないからか危なっかしい翔び方で動き回る。

レアモンは本来ならやらない様な、腐肉を伸ばす攻撃を仕掛けてきた。

その触手により、あちこちが破壊されていく。

翔びながらなのははレイジングハートに訊ねる。

「あ、あの……アレは一体……？　生き物？」

《Ｎｏ．　ｉｔ　ｉｓ　ｎｏｔ　ａ　ｌｉｖｉｎｇ　ｂｅｉｎｇ.
ｉｔ　ｉｓ　ｅｎｔｉｔｙ　ｆｒｏｍ　Ｌｏｓｔｌｏｇｉａ（生き物ではありません。ロストロギアの異相体）》

レイジングハートは、丁寧になのはの疑問へ答えた。尤も、アレはデジタル生命体で歴きとした生物だが。

其処へ攻撃が入る。

「ああっ！」

《Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ》

レアモンの攻撃は、レイジングハートが展開した桜色の障壁に弾かれる。

《Ｙｏｕｒ　ｍａｇｉｃａｌ　ｐｏｗｅｒｓ　ａｒｅ　ｉｍｐｒｅｓｓｉｖｅ（良い魔力をお持ちです）》

その高い魔力をレイジングハートが称賛した。

「凄い、予想以上だ！

貴女の魔力が有れば、アレを止められます！　レイジングハートと一緒に封印を！」

《Ｔｏ　ｓｅａｌ　ｅｉｔｈｅｒ　ｇｅｔ　ｃｌｏｓｅｒ　ａｎｄ　ｔｈｅ　Ｓｅａｌｉｎｇ　ｍａｇｉｃ　ｏｒ　ｕｓｅ　ｍｏｒｅ　ｐｏｗｅｒｆｕｌ　ｍａｇｉｃ（封印の為には、接近による封印魔法の発動か、大威力魔法が必要です）》

翔びながらレクチャーを受けるが、いまいち理解出来ずにいた。

「え、えと……」

「Ｉｍａｇｉｎｇ　ｙｏｕ'ｒｅ　ａｂｏｕｔ　ｔｏ　ｓｔｒｉｋｅ（貴女の思い描く【強力な一撃】をイメージして下さい）」

「そんな、急に言われても……っ！」

なのはの戸惑いを余所に、レアモンはフェレットへと襲い掛かる。
それを見たなのはは障壁でフェレットを庇った。
「うう……うっ」
《Ｈｏｌｄ　ｏｕｔ　ｙｏｕｒ　ｓｔｒｏｎｇｅｓｔ　ｈａｎｄ（利き手を前に出して）」
言われて左手を前に突き出すと、手首周りに魔方円が取り巻く。
《Ｓｈｏｏｔ　ｔｈｅ　Ｂｕｌｌｅｔ》
突き刺した左掌に桜色の球体が生成され、レイジングハートが合図を出した。
《Ｓｈｏｏｔ（撃って）》
合図と共に撃ち放たれ、球体がレアモンを撃ち抜く。
「ハァ、ハァ、ハァ……」
左腕を前に突き出した姿のまま、肩で息を吐く。
「あっ、逃げた！？」
フェレットの言う通りで、レアモンは屋根伝いに逃げ出してしまった。
なのはフライヤーフィンを両足に出すと、空を翔んで追い掛ける。

「追い付けない、あんなのが人の居る所に出て行ったら！　さっきの光、遠く迄飛ばせない？」

以外と速い動き。

本来のレアモンの動きではあり得ないが、何らかの要因がレアモンを強化しているらしい。

尤も、なのはには知る由も無い事だが。

レイジングハートはなのはの問いに応える。

《Ｉｆ　ｔｈａｔ'ｓ　ｗｈａｔ　ｙｏｕ　ｄｅｓｉｒｅ（貴女がソレを望むなら）》

なのはは決意の表情で頷くと、近場のビルの屋上へと降り立ち、息を吐く。

同時に胸の奥に在る魔力吸収精製器官、リンカーコアに魔力を蓄めていった。

《Ｆｏｒｃｅ　ｙｏｕｒ　ｉｎｔｅｒｎａｌ　ｓｐｉｒｉｔｕａｌ　ｈｅａｔ　ｔｈｒｏｕｇｈ　ｙｏｕｒ　ａｒｍｓ（そうです。胸の奥の熱い塊を、両腕に集めて》

言われた通り、胸の奥に在る熱い塊……リンカーコアの魔力を両腕に集めるイメージを作る。

《Ｍｏｄｅ　Ｃｈａｎｇｅ　Ｃａｎｎｏｎ　ｍｏｄｅ》

レイジングハートの形状が変化し先端が槍の様に変わって、トリガーが現れた。

なのはの魔力光の色、桜色の翼が三枚……左右と下に展開して、残光がまるで舞い散る羽の様だ。

駆けてきたフェレットがソレを見て驚く。

「まさか、封印砲？
あの子、砲撃型っ！？」

《Ｓｈｏｏｔ　ｉｎ　Ｂｕｓｔｅｒ　Ｍｏｏｄ（『直射砲』形態で発射します）》

レイジングハートの補助でレアモンにサイティング。

《Ｉｍｍｅｄｉａｔｅ　ｆｉｒｅ　ｗｈｅｎ　ｔａｒｇｅｔ　ｉｓ　ｌｏｃｋｅｄ（ロックオンの瞬間にトリガーを）》

頷くと、逃げるレアモンを睨み付けた。

マーキングサイト……

レアモンにロックオン。

トリガーを引く。

レイジングハートから桜色の奔流が溢れ出して、魔力エネルギーが放出された。

「あっ！？」

反動を受け切れなかったのか、ひっくり返って尻餅を付くなのは。

しかし桜色のエネルギーはレアモンにしっかり追い縋り、奔流が呑み込んだ。

《Ｎｉｃｅ　Ｓｈｏｏｔ》

レイジングハートが排熱しながら褒める。

起き上がったなのはは、カタカタと震えていた。

「い、一撃で封印した？」

フェレットは、なのはの力に只々驚くしかない。

浮かび上がっているのは、碧い菱形の宝石。

「此れがジュエルシードです。レイジングハートで触れて……」

「こ、こう？」

フェレットに言われるがままに、レイジングハートを碧い宝石に近付ける。

《Ｉｎｔｅｒｎａｌｉｚｅ　Ｎｏ．２１》

ジュエルシードを封印後、バリアジャケットが解除されて私服に戻

り、レイジングハートは元の赤い宝石へと還った。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

一方の太一は槇原動物病院まで来ていた。

病院の惨状を見て呆然となる太一。

「うわ……これ見たら、愛さんが泣くな」

槇原　愛の夢の結晶だった動物病院が、結構壊れてしまっている。

「何とかしたいけど、俺の力じゃな～」

神ではあるまいし、太一にはどうする事も出来ない。

だけど、あの頃の愛が思い起こされる。

まだ愛が獣医では無くて、学生だった頃にはやて共々さざなみ寮で世話になっていた時、目映い笑顔で夢を語ってくれた。

夢を語り、夢に向かって邁進する姿があまりに美しくて、前世で選ばれし子供のリーダー的な位置に居た頃に、夢や希望に満ち溢れていた仲間達を思い出す。

だからだろうか？

キレイな夢を、目を輝かせて語りつつ現実を見据えながら歩む姿は

本当に眩しかった。

大学を卒業し、研修も終えて、とうとう夢を叶えた愛が耕助の胸で泣いていたのを見ていただけに、太一は我が事の様に悲しくなる。

胸が締め付けられた。

そんな太一の感情に反応したのか、Ｄ－アカシックが光を放ってカードがホルダーから飛び出す。

「な、何だ！？」

ベルトからデジヴァイスを外し、カードを手に取るとカードには英語表記でこう書かれていた。

【ＲＥＳＴＯＲＡＴＩＯＮ】

「レストレイション……？
修復だって！？」

表記通りの効果で、しかもこのシチュエーション。

「は、はは……都合が良過ぎだろう？」

太一は思わず笑ってしまうが、今は有難い。

まるで“こうなる事が判っていたかの様に”お誂え向きのカード。

もしかしたら、太一を此処に転生させた存在はこの事を識っていたのかも知れないと思いながら、カードをＤ－アカシックへと読み込

ませた。

「カードスキャン、物体修復……ＲＥＳＴＯＲＡＴＩＯＮ！」

カードの情報を読み込み、Ｄ－アカシックは根源情報にアクセス。

元々の形をアーキテクチャとして構築し、破壊された物質を使って形状を成していく。

修復というだけあり、何も無い所から創り出すのではなく、壊れた物質を再構成しているらしい。

僅かな時間で動物病院自体も、周りのアスファルトも完全に元に戻った。

「ハァ、ハァ……よ、良かった……」

修復が終了後、太一は肩で息を吐く程に疲弊する。

どうやら修復に使う資材はともかく、エネルギーの方は太一のモノを使う様だ。

太一は知らないが、結界が展開されていた為に此処では何も起きなかったかの様に静かだ。

「？　しかし、これだけの事があって誰も気が付かなかったのか？
　まあ良いか……早く高町を捜さなきゃな」

再び駆け出す太一が道を歩くなのはを見付けだしたのは、１０分後の事だった。

太一は携帯電話で高町家に連絡を入れると、何故か肩にフェレットを乗せているなのはと共に戻る。

道すがら、フェレットを見た太一はフェレットの瞳に確かな知性を感じた。

「なあ、あの声ってさ……お前か？　フェレット」

「っ！？」

「八神先輩？」

フェレットもなのはも驚愕する。

「救けてって、頭の中に語り掛けてきたろ？
高町もソレを聞けて、それでみんなを振り切って外に出たんだな？」

あまりに的確な指摘を受けて観念したのか、フェレットは全てを話す。

自分の名前が【ユーノ・スクライア】である事。

ジュエルシードの事。

魔法の事。

魔導師の事。

次元世界の事。

古い遺跡で発掘した【ロストロギア】【ジュエルシード】を管理局に保護して貰うべく輸送中、輸送船が事故を起こしてしまい２１個のジュエルシードがこの世界へと散らばってしまう。

ソレを回収する為管理局に連絡後、先行して捜しに来たのだと言う。

ジュエルシードが発動してしまえば、この世界に被害が出てしまうから。

だいたい判ったが、判らない事もある。

それで何故、この世界にまでデジモンが顕れたのか。

“基本的に”は、デジモンが居ない世界だと聞いていたのだが……

ユーノ自身、レアモンについては識らないみたいだったし、ユーノが言う【次元干渉型】というのが理由がも知れないと考える。

デジモンがこの世界に居ないのは、ゲートが開いていないだけで存在はしているのだとすれば、次元干渉型のジュエルシードが簡易的にゲートを開いてしまい、ジュエルシードと同化したと考えれば辻褄も合う。

これからも関わるとして、懸念があった。

それはレアモンが明らかに暴走して、パワーアップをしていたと言う事だ。

この先に出て来るデジモンも、問答無用で襲って来る上に普通より

強い可能性が極めて高い。

成熟期ならまだ良いが、更に完全体……果ては究極体に進化されたりしたら拙い事になるだろう。

太一はこの事を、皆に話すべきか否か迷っていた。

尚、帰宅後なのはが兄からお説教をされたのは、当然の結果だろう。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

夜間の街。

高々と建ち並んだビル群、そのビル群の一つの屋上でビル風が吹き荒ぶ中に在って、長い金髪をツインテールに結った黒服の少女が、街を見下ろしながら呟く。

その手には金色の三角形をした宝石……

「第９７管理外世界、現地名称……地球。形状は菱形で、碧い宝石。母さんの捜し物、ジュエルシードは……此処に有る」

《Ｙｅｓ　Ｓｉｒ》

金色で三角形の宝石らしき物が、少女の言葉に反応して応えるのだった。

第１０話：魔導師（後書き）

まあ、ご都合主義というヤツですね。

感想をくれた皆さん、本当にありがとうございます。

次回

第１１話：第二の探索者

宜しくお願いします。

サウンドステージ０１（前書き）

少々、遅くなりました。
予定を少し変更して、今回はサウンドステージ（サウンドじゃないけど）です。
要は幕間にある話ですね。
感想に在ったアドバイスに基づき、簡単にですが太一サイドとは別の視点から描いてみました。

サウンドステージ０１

・

サウンドステージ０１
第４．５話
【それはあの日の別視点】

【喫茶翠屋】

駅前に在る喫茶店【翠屋】は、今日も今日とて大繁盛していた。
行き届いた教育によるものか、店員は只容姿の良いのを揃えただけではない質の良さを兼備え、パティシエール手ずから作るスイーツも、どれだけ数を作っても味が劣化しないと評判だ。
普通、手作りだと数を熟すと味がブレる事もある。
ほんの僅か、僅かなブレが時に味を台無しにするものなのだが……
そんな喫茶店に、店長の娘の高町なのはが頭にツインテールをピコピコと揺らしながら、勢いよく駆け込んで来た。

「お父さん、お父さん！
大変大変大変なの！」

「こら、なのは。お店で騒いじゃダメだろ？」

「あう……」

「それで、どうしたんだい？　そこまで慌てるからには、余程の事なのだろう」

お客様の手前、一応の注意はした高町士郎だったが、いつも“良い子”のなのはがあれだけ騒いだのだ。

並大抵の話では無いなと、士郎は“直感”していた。

裏に携わった長年の勘に頼るまでも無い。

なのはを奥へと連れて行くと、事情を聞くのだった。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

其処は所謂大学。

長い紫の髪の毛を揺らし、鞄を手にした少女が茶髪に近い黒髪の青年と一緒に、キャンパスを歩いている。

2人は……特に少女の方はニコニコと幸せそうな表情で、他愛ない会話を楽しみながら歩く。

ニ年前の少女とは大違いだと、彼女をよく識る人間が見ればいうだろう。

それ程の変化だった。

少女の名前は月村　忍。

青年の名前は高町恭也。
主に忍が話題を振って、それに恭也が返すというものだったが、本人達は十分に愉しんでいる。
ＰＩ　ＰＩ　ＰＩ……
そんな２人の会話に、忍の携帯電話の呼び出し音が挿まった。
「？　ノエルからだわ。
今日は迎えに来ない筈だけど、何かしら？」
画面には番号とノエルの名前が在った。
詰まり、ノエルは携帯電話で掛けてきたと云う事。
月村邸からなら、個人名は表示されない。
キーを押し、耳に宛てるとノエルの声が耳を突く。
〔忍お嬢様、今は学校の方でしょうか？〕
「ええ、そうよ。ノエル、一体どうしたの？　何か緊急事態でもあったの？」
〔先程、喫茶翠屋の高町士郎様から連絡がありまして……〕
ノエルからの報告に真剣な表情になる忍。

そんな忍の雰囲気を敏感に感じ取った恭也は、背筋を伸ばして身構えた。

その佇まいに、先程までの甘い恋人の雰囲気は無い。

話を聞き終えた忍が、携帯を閉じると恭也は訊ねる。

「忍、何か在ったのか？」

振り向く忍の顔は、血の気が引いて青褪めていた。

「恭也ぁ、すずかが……、それにアリサちゃんも！」

忍が語った話は最悪なものだった。

忍の妹の月村すずかと、友達のアリサ・バニングスが攫われたのだという。

なのはが待ち合わせ場所に来た時には既に2人共居らず、同じ聖祥小学校の生徒らしき頭にゴーグルを着けた少年から話を聞いたのだと、なのはが言っていた。

此処で肝要なのは、事が起きてから一切の連絡が月村にもバニングスにも来てはいないと云う事だ。

一般的な素人による営利誘拐であるなら、今頃はどちらかか或いは両方に身代金の要求があるだろう。

それが無い。

素人なら、身代金欲しさの誘拐ではなくすずか、若しくはアリサ自

身が目的。

かなり下種な話だ。

その場合、速やかに救出出来なければ身体にも心にも拭えぬ傷を付けられる。

もしもそうなれば、忍は警察に突き出すなんて甘い事はしないだろう。

それこそ、生まれてきた事を後悔する程の目に合わせた挙げ句に、自ら八つ裂きにするかも知れない。

これは月村の誰も止めはしない。

裏に通じる月村は、決して舐められる訳にはいかないのだから。

月村に手出しすれば一体どうなるかを報しめる生贄として、この世から消えて貰い見せしめとする為に。

だが、これが玄人の仕業であれば色々と違ってくる。

欲したのは“月村”だ。

それも純血に近い者。

常に恭也（御神の剣士）が張り付いている忍より、普段は張り付いた護衛が居ないすずかを狙った。

アリサは近くに居た為に、巻き込まれたのだろう。

どちらにせよ、即金目的では無いのだから連絡が来る筈も無い。

そしてそのどちらであろうと、すずかが害される。

話を聞いた恭也は、車を出して迎えに来たノエルと合流し、集合場所へと向かうのだった。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

焦ってもどうしようも無いとはいえ、逸る心は抑え切る事が出来ない。

この場の全員が其処は一致していた。

とにかく関係者各位を集めて、話し合いを持つ。

この場では、今居る誰が欠けてもいけない。

被害者の家族……月村　忍とデビット・バニングス。

裏の荒事を専門とする高町士郎と高町恭也。

美由希まで連れて来た。

これは、手が足りないのが理由だ。

なのはに家族へ連絡をしろと言ったという少年が追い掛けたらしい

が、連絡先を聞いていなかった為に見付けたとしても双方共に連絡が取れないのだ。

月村の代表は綺堂さくら。

忍とすずかの両親は海外で仕事中の為、どうしたって間に合わない。

だから、2人の後見人となっているさくらが代表を務めている。

バニングスは勿論デビットが務めて、高町は士郎が代表だ。

時間が無い以上、話し合いは簡単に終わる。

要は早く見付けて保護し、犯人を打ちのめす。

難しく言って、言葉を飾っても意味は無い。

どう言おうが、どう綺麗事で装飾しようが、やる事に変わりは無いのだから。

人質となるであろう2人の救出が大前提ではあるが、犯人が同じ場所に居た場合……しかも建物の中の様な閉鎖空間だったなら、先に犯人を倒す必要がある。

士郎も恭也も美由希も気を引き締めた。

此処で既に“コト”が終わっているという可能性は考えない。

絶望は力を与えてはくれないのだから。

御神の剣士3人は、装備を整える。

小太刀、鋼糸、飛針。

小太刀二刀御神流の一般的な武装だ。

御神を識らない人間が見れば莫迦かと思う様な古臭い武装だろうが、彼らはこの装備を以て銃と渡り合い、立ち回る事が出来る。

狭所なら数人づつに分断した上で、各個撃破してしまえるのだから。

この話し合いをしている最中も、月村とバニングスの手の者が人海戦術で捜し続けていた。

見付けたら直ぐに連絡が入ってくる手筈になっている為、もどかしさを感じながらも此処に……海鳴の中心地に居る。

東西南北、何処であっても直ぐに駆け付けられる様に……だ。

話が行ってからさくらは、海鳴市を出る全ての通路を封鎖させている。

裏に精通するという事は、ある意味で表をかなり自由に出来ると云う事。

公的機関を使っての封鎖である為、情報の偽装によって無関係な人間と関係者を選別していた。

表の、それも只の一般人には迷惑極まりない話だ。

全員が集合して約２０分。

待望の連絡が来た。

とにかく、車で近場までは移動する必要がある。

デビットが猟銃をカシャカシャさせているのが怖い。

もしもアリサにナニかがあれば、犯人のド頭に撃ち込んでやると云わんばかりの勢いだったから。

結論から言えば、犯人がド頭に鉛弾を喰らう心配は無くなった。

序でに言えば、忍が犯人を八つ裂きにする事もだ。

アリサとすずかは両名共に怖い思いこそしたが、心身共無事に救出された。

しかし、それでも一切合財全く問題無しとはいかなかったのだが……

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「どうしよう、お姉ちゃん……知られ……ちゃった、アリサちゃんと救けてくれた八神先輩に……夜の一族の事、知られちゃった！」

涙を浮かべ、忍の胸に抱き抱えられるすずか。

知られたくはなかった事、ソレを知られてしまったという恐怖。

自分が、自分の家族が……延いては自分の一族が。

【夜の一族】と名乗っている吸血種だという事をだ。

アリサの、信じられないという表情が忘れられない。

あの凍り付いた表情、あれは違う生き物を見る様な、そんな表情ではなかっただろうか？

「今、さくらが八神太一君について調査をしてくれているわ。その結果次第でだけど、契約する事も視野に入ってる。すずかはどうしたいの？」

「け、契約……って、お姉ちゃんと恭也さんがした？

私が、八神先輩と……」

顔を赤らめたすずかが何やら彼方に逝ってしまうが、今はすずかの選択を知りたいから敢えて現実に還って来てもらう。

「すずか、起きなさい！」

「ハッ！」

妄想も仕方がない。

恭也と契約をして以降の忍を知るすずかとしては。

「それで、すずか。すずかはどうしたい？」

「出来るならしたい！」

普段大人しく、積極性に欠ける処もままあるすずかが随分と積極的だなとおもったが、忍は一つの可能性に気が付いた。

「すずか、もしかして彼の事を識ってたの？」

「あ……うん」

はにかみながら頷く。

「前から少しだけ……」

何度か図書館で見掛けた。

自分と同じ年頃の、車椅子に乗った少女を連れて偶に来ているのを。

司書の人が、少女を八神さんと呼んでいるのを聞いていたし、少女が太一兄ちゃんと呼んでいた事から、名を八神太一だと推測する。

そんな2人を時折見掛けていたが、本当に楽しそうな妹らしき少女と優しく接する太一の姿に、あんな兄妹関係も良いなと見ていた。

すずかにとって転機となったのはある一幕。

すずかはまだ全ての棚に手が届く訳ではなく、少し上の本が取れずに苦戦をしていた時の事だ。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「う～んっ！　後……少しなんだけど……な！」

後僅かで届きそうだった事もあり、司書の人を呼んだり脚立を探したりせずに、自分で取ろうとしていた。

其処に、取ろうとしていた本を棚から抜き取る手が背後から伸びてくる。

「あ……」

最大限まで爪先立ちしていたすずかは、振り向いた際にバランスを崩してしまい倒れそうになった。

それを先程本を持っていった人物が支えてくれる。

すずかは顔を見て驚いた。

それはすずかが時々見ていた人物、八神太一（仮）。

「大丈夫か？」

「あ、はい……」

「そっか」

ニカッと笑う彼に、妹？　の時とは違う笑い方を見て『こんな笑い方もするんだな』と思った。

「ほらこれ」

「え？」

「取りたかったの、これだろ？　あれ、違ったか？」

「あ、いえ。これです！
ありがとうございます！」

「そっか、良かった。俺が驚かせちゃったみたいで、ゴメンな？」

「い、いえ！　そんな……」

それが初めて太一と会話した瞬間だった。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「成る程ね……」

どうやら本人は乗り気だ。

後はどう交渉するか……

「相手は子供だし、少し怖い目に遭って貰うかな？」

その後、さくらから連絡が入って八神太一の身辺調査報告書を受け取った。

忍は恭也を呼ぶと、頼み事をする。

それは……

「詰まり、俺に道化を演じろ……と、そういう事なのか？」

「道化？」

「ああ、多分だが忍の作戦とやらは上手くいかない。
あの、八神太一……だったか？　あの子にそんな作戦は通用しないだろうな」

僅か一合だけ……

恭也が太一と打ち合ったのはそれだけだったが、確かに感じたのは戦闘者の氣。

恐らく、少し脅かしたくらいで怯む相手ではない。

「ふ～ん。私はそういうのって解らないけど、恭也が言うならきっとそうなんだろうね。じゃあ作戦が失敗したら正攻法に切り替え……かな？」

「あ～、飽く迄実行するんだな」

「だって、折角考えたんだしね？」

朗らかに笑う忍を見て、溜息を吐く恭也。

「判った。俺と忍は一蓮托生……誓ったからな？
ずっと傍に居るってさ」

「うん！」

苗字の如く、柔かな月の灯りみたいな笑顔で忍は頷いたものだった。

そして交渉が始まり、その間にすずか自身はアリサと一緒に……

すずかは全てを話す。

アリサも全てを理解する。

「それでね、アリサちゃん……一族の約束事が在ってね、一族の秘密を知った人に【誓い】を立てるかどうか選んで欲しいんだ。知った事を“忘れて”過ごすか、知ったまま一族と共に秘密を共有するか」

唖然となるアリサに、少し寂しそうな表情ですずかは続ける。

「もしね、アリサちゃんが忘れたいなら、ちょっとしたおまじないで忘れさせてあげるよ。でももし、秘密を共有してくれるなら……友達でも姉妹でも、他のでも……関係はともかくとして、ずっと一緒に……」

しどろもどろではあったものの、すずかはアリサに訊ねた。

「どうかな？」

「すずか……」

ビクリッ！　肩を震わせるすずか。

「このアリサ・バニングスを舐めないでよね？
高々、アンタが人間と少し違ったからってさ、それでアタシがすずかを嫌う訳無いでしょ！？」

アリサはすずかを抱きしめると、耳元で囁く。

「アタシはすずかの友達、親友なんだからね！」

「うん……うん！」

別室で、姉と将来の義兄が何やらやっている中、２人の絆が深まった。

.

サウンドステージ０１（後書き）

次回は本編です。

＊注意＊
この噺はクロノをアンチするモノでは無いのですよ。別の噺では、地球への密入国などの疑いで逮捕してみたから、今回はバトルでいくだけのネタです。

第１１話：第二の探索者（前書き）

遅れて申し訳ありません。

ネタが纏まらないままだったので、少し放置気味でしたがちょっとづつ書いて、漸く完成しました。

.

第１１話：第二の探索者

・

取り敢えずはこの後、予定通り太一とはやては高町家にご宿泊して、はやての事は早朝にノエルに車で送り届けて貰う。

学校へはなのは、アリサ、すずかの３人と共にバスで通学している。

魔法に関しては、今のところはなのはの選択を優先して、今回はなのはがフェレットを心配して飛び出してしまったという事で口裏を併せた。

「（後で愛さんにもある程度は教えておこう）」

急にフェレットが居なくなって、愛も恐らく心配して捜すだろうし。

太一はそう考えて支度を始めた。

愛が病院に出勤（自営業だけど）した頃を見計らった太一は電話を掛ける。

逃げ出したフェレットを、此方で既に保護したと。

愛はやはり気に病んでいたらしく、ホッとした雰囲気が携帯越しにも伝わった。

ソコからは普通に授業を受け、休憩時間を利用してはＤ－アカシックを色々と調べてみる。

昨夜、愛の【槇原動物病院】を修復したカード。

アレは間違いなく昨夜の、あの時の為に用意されていたカードだろう。

そうでなければ、あの瞬間に飛び出してきた事への説明が付かない。

「そういえば言ってたな。

原典から分岐した平行世界だって。そして、本来なら転生者の多くが【原典情報持ち】とか、所謂【原作知識アリ】とか云われているんだって……」

原典世界……一切の二次的干渉が為されない【最良界】と呼ばれる世界。

詰まり、イレギュラーたる存在が無い世界。

それがＴＶ放映されている【受容世界】の物語だ。

其処から分岐して、様々なイレギュラーが干渉をした世界が二次小説等で発表されているらしい。

それらもまた、時空の壁の彼方側で存在しており、世界はそれこそ分単位、秒単位で増え続けている。

そういう世界が、それこそごまんと存在して、更に壁を取り払って交わる世界すら存在しているのだ。

それが所謂、三次的干渉。

「もしかしたら、俺をこの世界に“イレギュラー”として送り込んだ“神”も、此処とよく似た世界ってのを経験したのかもな」

だからこそ識っていた。

愛の病院が破壊されてしまう事を。

そして恐らくは……

「高町が魔法やユーノと出逢う事も、はやてが半身不随なのも識っていたって事か……」

だったら、はやての病気を治す方法も識っているなら教えて貰いたいものだと、太一はそう思う。

否、確実に識っている筈だと考えている。

あの夜に現れた大人モードはやては、間違いなく自身の両脚で立っていた。

詰まり、はやての脚の麻痺は決して不治の病では無いと云う事だ。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

なのはは授業を受けつつ、念話を応用して赤い宝石として首から提げているレイジングハートと、会話を始める。

〔レイジングハート、聞こえる？〕

《Ｙｅｓ．Ｉ　ｃａｎ　ｈｅａｒ　ｙｏｕ》

〔昨日のアレコレは、やっぱり全部レイジングハートのお陰？〕

《Ｙｅｓ，ｍｏｓｔｌｙ（そうです、大半は）》

〔やっぱり、高性能なんだ〕

《Ｂｕｔ　ｕｎｆｏｒｔｕｎａｔｅｌｙ．Ｉ　ｃａｎ　ｄｏ　ｌｉｔｔｌｅ　ｏｎ　ｍｙ　ｏｗｎ．（ですが残念な事に、私単体では何も出来ません）》

デバイスは飽く迄もデバイスであり、“使う存在”が在って初めて意味を為す。

デバイスとは、特定の機能を果たす為の周辺機器の事なのだから。

ミッドチルダ等で使用されている“デバイス”という言葉も、意味合いは同じで魔導師や騎士の外部周辺機器（武装）として扱われている。

《Ｉｎ　ａ　ｓｅｎｓｅ，Ｉ'ｍ　ｍｅｒｅｌｙ　ａ　ｖｅｈｉｃｌｅ．（私は謂わば【乗り物】です）」

そういう意味ではレイジングハートの言っている事は正しく、レイジングハートという“乗り物”は高町なのはという“ドライバー”無しでは何も出来ない。

ドライバーが、その意志を持って乗り込み、運転しなければどれ程

の性能であっても、その性能が発揮される事も無いのだから。
レイジングハートの説明を聞いたなのはは、問い掛けてみた。
「私はレイジングハートの乗り手に成れる可能性……ある？」
その質問に答える。
その答えは要約すると……
『今後の貴女次第です』
詰まりは、そういう事だ。
なのははコクリと、軽く頷いたものだった。
昼休み、なのはとアリサとすずかは、太一を伴って屋上に上がると弁当を広げて食べる。
因みに、今日の弁当は桃子が用意してくれたモノだ。
愉しく弁当を食べている４人だったが、すずかは太一となのはを見比べて確信に近いものを感じた。
すずかの胸の奥底、輝く何かが疼いているのだ。
なのはの目覚めた魔力の煽りを受けて。
そして、なのはから感じる“ナニか”をすずかは太一からも感じていた。

２人には共通する“ナニか”がある。
すずかはそれを思うと、何か胸が締め付けられた。
すずかはそんな感情など、おくびにも出さずにニコニコと笑顔を見せてオカズを口に運ぶ。
「あ、そうだ。八神先輩」
「何だ、バニングス」
「それですよ、ソ・レ！」
「？　ソレって？」
アリサの言葉にいまいち要領を得ない太一は、首を傾げている。
「すずかの事は名前呼びなのに、アタシとなのはの事は苗字ですよね？」
「あ、ああ……」
「すずかと“友達”になって名前で呼ぶのは判りますけど、こうして一緒に居るアタシ達ももう、友達だと思うんですよ。違いますか？」
「つまり、高町とバニングスの事もすずかと同じ様に名前で呼べと？」

アリサは立ち上がった形でズイッと身体を乗り出し、左腰に左手を添えて右手は顔の傍で人差し指だけを伸ばした状態で、太一に捲くし立てた。

確かに正論ではある。

チラリとすずかを見やるとすずかは苦笑し、首を縦に振った。

「判ったよ、これからも宜しくな。アリサ、なのは」

太一がそう言うと、アリサもなのはも嬉しそうに笑顔を魅せた。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

放課後になり、なのは達は帰路に付く。

尤も、アリサとすずかは塾があるのだが。

今回、太一は別行動だ。

サッカーの練習に付き合う予定が入っていると、太一から言われている。

校門を抜けると、なのははアリサとすずかと別れた。

「じゃ、アタシとすずかはお稽古の日だから」

「行ってきます」

「うん、お稽古頑張って」

アリサとすずかは、横断歩道を渡ると黒塗りの車に走った。

そんな平和な一幕など関係無いと謂わんばかりに、別の場所では異変が起きつつある。

しかし探知能力が低い為、太一はそれに気が付かずにいた。

【八束神社】

八束神社は、現在は修行の旅に出ている巫女さんが管理人をしていた神社。

現在は、有志による月一の掃除などで管理されていて誰も居ない。

この八束神社でペットの犬を散歩させていた女性は、あまりの驚愕と恐怖に気絶してしまう。

犬が何某か咥え込んだかと思えば、ソレが輝きを放って犬をドーベルマンに似た生物へと変えてしまった。

驚くなと云う方が無理だ。

なのはも異変を感じ取り、現場へと向かう。

なのはは既に学校を離れ、近くに居た事も幸いしてジュエルシードの発現に気が付けたのだ。

しかし、なのはの前に別のジュエルシード発現体らしきものが行く手を阻む。

「へ？　真逆、この子も……！」

ユーノは念話で事態を聞いて、取り敢えずは目の前のジュエルシード発現体を何とかする方向性で動く事を提言する。

そして遠くのジュエルシードは、何とか自分が抑えてみると言って走った。

ユーノが太一に連絡をしなかったのは、太一からは魔力こそ在ったがなのは程の力を感じなかった事もあるが、なのはにせよユーノにせよ『自分が』という考えが強過ぎるのだ。

だから、余程の事が無い限りは“無関係な太一”を巻き込もうとは思わない。

ユーノが図らずもなのはを巻き込んだのも、一つには“自分”ではもうどうしようも無かったからだ。

そして、なのはの好意に甘えたのはなのはの“資質”に目を遣り過ぎた事が原因で、頭は良いし優秀ではあっても所詮は未だ９歳。

判断が未熟であるが故の、浅慮だった。

ユーノが高町家から走っている中、ドーベルマンに似た怪物は最早理性など存在せず、飼い主たる女性へと牙を突き立てる為、大きな口を開けて近付く。

しかし、いざ牙を突き立ようとした瞬間、石が飛んできた。
ドーベルマン擬きは、邪魔された事に怒りを感じたのか、石が飛んできた方を振り向くと、其処に立っていたのは金髪の“少年”。
「駄目だよ、ご主人様を食べたりしちゃ？」
ニコリと微笑んだ少年は、白を基調に金色のアクセントが左下にあり、銀色の六角形の縁取りを持つモニターの機械を手にする。
「さあ、征こうか？」
《うん！　ボクと君の力を魅せてやろう！》
モニターに紋様が浮かぶ。
それは嘗て、とあるデジタルワールドを救った少年の心の在り方を示した紋章。
「Ｄ－アカシック、デジメンタル・アァァァップ！」
《ＤＩＧＩＭＥＮＴＡＬ　ＵＰ》
紋章が形を成し、金色の物体となってソレが金色の光を放ち、光が少年を包み込んでいく。
「アーマー進化ぁぁっ！」
光の帯が少年の腕、脚、身体、頭に絡み付くと意味在る形を採る。

それは、金色に輝くデジタルジャケット。
背中の翼で天を制する彼は高らかに叫んだ。
「天翔けろ希望よ、ペガスフォームッ！」
その姿は、少年の嘗てのパートナーが【希望のデジメンタル】で、アーマー進化した【ペガスモン】を人型にした姿だった。
少年の名前は石田タケル。
太一の嘗ての仲間である、高石タケルがこの世界で転生した存在。
タケルがＤ－アカシックを向けると、データが転送されてモニタに映し出す。
「ふうん、ドーベルモンかぁ」

【Ｄｉｇｉｍｏｎ　Ａｎａｌｙｚｅｒ】
ドーベルモン
属性：ウイルス種
世代：成熟期
種族：魔獣型
ワクチン、ウイルスのどちらにも属せる魔獣型デジモンで、此方はウイルス種。
スナイモンと同様、凶暴なデジモンで仮にテイマーが居ても、並の者では制御出来ない。必殺技は、敵の能力を封印する雄叫び【グラ

オ・レルム】と、敵の身体を貫いてデジコアを破壊する黒い光線を放つ【シュヴァルツ・シュトラール】

「うわ、怖いなぁ」

そのスペックを見て、冗談めかして言うタケル。

《じゃあ、やめる？》

「あの女の人を救けなきゃいけないからね」

Ｄ－アカシックから聞こえる声に答え、天を翔けた。

「ニードル・レインッ！」

タケルは髪の毛から金の針を飛ばす。

ドーベルモンが咆哮を上げると、針が速度を喪って落ちる。

「あれがグラオ・レルム」

駆け上がりながら考えた。

能力を封印する咆哮……

もしも自分が浴びたら、天を翔べなくなり、必殺技も使えなくなる可能性があるかも知れない。

「なら、陽動が必要かな」

考えを纏め、額にエネルギーを籠める。

「シルバーブレイズ！」

額の逆三角形から、銀色の聖なる光線が放たれた。

しかし、その素早い動きによって避けてしまう。

その際、一瞬だがタケルから目を放す。

「今だ、パタモンッ！」

《ＲＥＡＬＩＺＥ》

手にしたＤ－アカシックを前に突き出すと、電子音声が鳴り響きデジモンが姿を顕現した。

タケルの生前のパートナーデジモン、パタモンだ。

【Ｄｉｇｉｍｏｎ　Ａｎａｌｙｚｅｒ】

パタモン

属性：ワクチン種

世代：成長期

種族：ほ乳類型

大きな耳が特徴の哺乳類型デジモン。この耳を使って空を飛べるが、

時速1キロのスピードしか出ない為、歩いた方が遥かに早い。
『ホーリーリング』を身に付けておらず、聖獣型に分類されないが、秘められた聖なる力を宿す。『古代種』のデータを受け継ぐ。
必殺技は空気を一気に吸い込み、空気弾を吐き出す【エアショット】、強化版の【スパーキングエアショット】。得意技は、ダッシュして勢いを付けて体当たりする【プリティラッシュ】と、相手の攻撃を跳ね返すエアショット【迎撃エアショット】

「スパーキング・エアショット！」
突撃して、ドーベルモンの目にエアショットの強化型スパーキングエアショットをぶつけ、目潰しする。
苦しむドーベルモンに、タケルは天を翔けて宇宙を宿す翼から攻撃を放った。
「シューティングスタァァァァァーーッ！」
『グワァァァッ！』
翼より降りしきる隕石に傷付けられ、ドーベルモンからデジコードが出現する。
「闇より出でし絶望を、我が聖なる希望で浄化する。デジコードスキャンッ！」
そのままコードをなぞるとデジコードが吸収。

デジタマが残り、傍には犬が気絶していた。
そして宙に浮かぶジュエルシードを手にする。
「へぇ、太一さんが倒した奴と違って、生物に宿っていたのか？
それと「ソレを渡して下さいっ！」
思考の邪魔をする女の子の声に振り返ると、長い金髪に赤い瞳、黒服を身に付けた少女が立っている。
「君は？」
「話す意味はありません。
そのジュエルシードをこっちに渡して！」
鰾膠も無い態度に、タケルは肩を竦めた。
「正体不明な上、その態度じゃ渡せる物も渡せないと思うよ？」
「渡してもらえないなら、力付くでも渡して貰います」
人差し指と中指の間に金色で三角形の宝石を挟んで、タケルと対峙する少女は険しい表情をして叫んだ。
「バルディッシュ、セットアップ！」
《Ｙｅｓ，ｓｉｒ》
金色の三角形の宝石が明滅しながら応えると、金色の幕を展開。

《Ｂａｒｒｉｅｒ　Ｊａｃｋｅｔ　Ｓｅｔｕｐ》

金色の雷が乱舞し、少女のツインテールを結っていた黒いリボンが消えて髪の毛が降ろされると、着ていた黒服が消えて、白いシャツとショーツまで消えて肢体を晒す。

《Ａｘｅ　Ｆｏｒｍ》

少女が投げたソレは、顕れた黒い無骨な金属パーツを組み合わせ、一つの形を成していく。

響いた電子音声が語る通りに斧の様な形だ。

ヘッドには先程投げられた金色の宝玉が、コアとして埋め込まれていた。

雷は更に少女に黒を基調としたレオタードの様な服を生成し、その服は肩口から股間部に掛けて装着され、脚にも黒いハイソックスが装着される。

更に腰には赤い革ベルトと白いミニスカートが。

腕にも革ベルトが填まり、指先の開けた黒手袋も装着されて、バリアジャケット用の黒いリボンで再びツインテールに結わい付けた。

アックスフォームのバルディッシュわ構え、タケルを睨み付ける少女。

「やれやれ、どのくらい自信があるのか知らないけどね。短絡的過ぎだよ、君。

パタモン、時間だから戻って」

「うん」

パタモンを戻して、タケルも苦笑しながら少女と対峙するのだった。

・

第１１話：第二の探索者（後書き）

今回は説明出来ませんでしので、少し説明します。

パタモンがリアライズ出来る時間は約三分。

エンジェモンに進化した場合、一分程度になります。

完全体？　現在は不可能となっています。

タケルにとって今回の戦いは本意ではないのですが、“お話し”を聞いて貰えない……

帝さん、残念ですが無印編でオメガモンは出ません。

出しても、限定条件付きでウォーグレイフォームになる程度です。

デジモンとしてのウォーグレイは、流石に無理です。

次回

第１２話：希望と雷刃

宜しくお願いします。

.

第１２話：希望と雷刃（前書き）

サイト優先なので、やはり直ぐにとはいきません。

第１２話：希望と雷刃

・

睨む金髪の少女と、飄々と立っているタケル。

「今ならまだ止められるけど？　ホントにやるの？」

「私にはソレが、ジュエルシードが必要なんだ！」

《Ｓｃｙｔｈｅ　Ｆｏｒｍ》

黒い斧が変形し、電子音声と共に金色の刃を出現させる金髪の少女。

「ふむ武器か。パタモン、ホーリーロッド！」

《判った、タケル》

タケルもＤ－アカシックから、エンジェモンの武器であるホーリーロッドを出して構えた。

Ｄ－アカシックの能力の一つに、通常進化系列の武器を喚び出す能力が在る。

タケルのＤ－アカシックであれば、エンジェモンの持つホーリーロッド。

ホーリーエンジェモンが持っている、エクスキャリバーなどがそれだ。

但し、武器を喚べるだけで必殺技を使える訳ではないのだが。
この為、ペガスモンを基にしたペガスフォームで、ホーリーロッドを使うというチグハグな事も可能だ。
「ハァァァァァッ！」
金髪の少女が武器を振るって、迫ってくる。
それをタケルは弾く様に、下段から打ち上げた。
「ニードル……レインッ！」
それと同時に髪の毛を針の如く変え、撃ち放つ。
「くっ！」
《Ｄｅｆｅｎｓｏｒ》
金色の障壁がソレを防ぐ。
そのまま自分自身も魔法を発動させる。
「フォトンランサー、ファイヤ！」
金色の魔力スフィアが放たれて、タケルを襲った。
「ふっ、はっ！」
迫り来るスフィアを杖術の要領で弾く。

ホーリーロッドの両端で、スフィアを弾いて受け流してしまった為、在らぬ方向へ飛んでいってしまう。

《Ａｒｃ　Ｓａｂｅｒ》

「アーク……セイバァァーッ！」

肢体の上体を反らし、構えた武器を振り下ろすと金色の鎌の部分が、タケルに回転をしながら迫ってきた。

「シルバーブレイズッ！」

額から聖なる光線を放ち、アークセイバーを相殺。

そのままダッシュした。

「ロデオギャロップ！」

ジャンプ一番、タケルは少女を蹴り飛ばす。

「アァァァァァァッ！」

蹴りを受けた少女は、その反動で吹き飛ばされた。

「うっ、く……」

ノロノロと起き上がろうとしている少女に近付くと、そのまま頭を背後から押さえ込み、右手に持った光を湛えた長柄の鎌を奪い去って、右腕も抑える。

「あぐっ！　うう……」

完全に押さえ付けられて、少女は苦しそうに呻いた。

「もうヤメにしないかい？
僕も女の子に乱暴な事をするのは、好きじゃないんだけどな……」

「ウォォォォォォォォォォォォォォォォォォッ！
フェイトからぁ、手をぉっ……はぁなぁせぇぇぇぇぇぇぇっ！」

「シルバーブレイズ！」

「うぎゃっ！？」

橙色の髪の毛に、犬耳と尻尾を付けた女性が行き成り襲って来たが、振り向き様に放ったシルバーブレイズを腹に受けて吹き飛ぶ。

「あ、アルフッ！」

「ダメだよ、奇襲するなら気配を自然に溶け込ませた上で、一切の音を立てずにやらないと。叫ぶなんて、以ての外さ」

シルバーブレイズは額から発する為、両手が塞がっていても撃てる技だ。

だから、せっかくの奇襲も無意味に叫んだ事が徒となって、失敗に終わる。

これでもタケルは１０２年生きており、小学二年生の頃から８０歳

くらいまでを現役で戦っていた。

自身や仲間達の冒険譚を綴ったモノを、本として出版してデジタルワールドやデジモンに関する理解を深めて貰う傍ら、兄や太一達と共に闇組織を潰して平穏を保ってもいたのだ。

場合によっては、洗脳された小さな子供に襲われる事もあり、なるべく傷付けずに制圧出来る様に武術も学んでいる。

仮令子供だろであろうと、デジモンのパートナーであれば、進化段階によっては一軍とも戦える戦力だ。

それは、例えばメタルグレイモンの【ギガデストロイヤー】一つ挙げてみても判るだろう。

一発が戦術核兵器レベルの破壊力を秘めている。

重要な場所で突然進化させて、行き成り放ったならば対応も出来ない。

それに、デジモンというのは強力な電子体。

電子機器を狂わせる事が出来る者も居る。

これはディアボロモンが、ペンタゴンに侵入して核を撃った事からも明らか。

デジモンとは使い様によって、強力な電子兵器と成り得る存在なのだ。

“あの世界”で、大人はデジタルワールドに行く事が出来なかった（デジモンに選ばれた者はその限りではない）が、なら選ばれた子供を利用すれば良い。

その結果、子供を拉致監禁したり、非道な行いをしたりと碌でもない人間が出て来たのだ。

一番困ったのが非合法な闇組織ではなく、正規の国の軍が行った場合だった。

非合法な闇組織なら、ただ潰せば済む話だが、某国などが裏から闇へと手を回した場合、下手な事をすると国際問題どころか、テロリスト扱いされかねない。

流石に、自分達の子供が大きくなり、パートナーデジモンを連れる頃になると、法の整備などもされて国がそんな真似をすれば、国際社会で叩かれる様になって自重したが……

それでも闇組織の暗躍が留まる事はなく、国が嘗て作った組織が未だに活動をしていたりと、太一やタケル達の活動が終わりを告げるのに何十年も過ぎた。

だからこそ、タケルは戦い慣れている。

幾ら転生して、子供の姿をしていたとしても、記憶を継承している以上は嘗ての経験が活きてくる。

実戦経験に乏しい少女らでは、勝てる筈もない。

「さあ、もう降参した方がいい。これ以上は僕も出来れば傷付けた

くはない！」

それは、まだ抵抗をするなら明確に傷付ける事も視野に入れていると、そういう意味だ。

少女は自分を救けに入った女性をチラリと見て、自身の敗北を完全に覚った。

「判り……ました」

哀しそうに、口惜しそうに力を抜く。

こうして、タケルの戦いは終息を見せる。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

一方、なのはの戦いは未だに続いていた。

「くっ！　征って！」

桜色の魔力スフィアを四つ作り出すと、ソレを相手に撃ち放つ。

しかし、ソイツは背中に担いでいた骨を巧みに操るとスフィアを明後日の方向に弾く。

「そ、そんな……」

金毛の猿の様な怪物はノシノシと歩いて来て、骨を振り上げた。

「ヒッ！」

なのはは恐怖に引き吊り、息を呑む。

「なのはぁぁぁっ！」

翠の魔力光が輝く障壁が、円形の魔方陣と共に発生して、振り下ろされた一撃を防いだ。

その障壁の中心にいたのはフェレットの姿をしている魔導師、ユーノ・スクライアだった。

「ユーノ君？　どうして！？」

「魔力反応の在った地点に行く途中だったんだけど、なのはが追い詰められているのを見て！」

「う……ゴメンね」

自分の不甲斐なさがユーノの足を引っ張った。

そう考え、暗くなる。

なのはは基本的に射砲撃を得意とする魔導師。

接近されると能力が十全に使えなくなる。

足を止めて呑気に撃てるのは、飽く迄もチームを組んで前衛に護られている状況だから。

1対1となれば、砲撃を撃つ為のチャージなどさせては貰えないものだ。

近接戦闘(クロスレンジ)が出来れば隙も突けるだろうが、今のなのはは魔法に触れて間もない。

その為、近接戦闘スキルが無いに等しかった。

況してや、これまた呑気に様子見でワンショットなどと軽く魔力弾を放った事により、相手は中距離や遠距離攻撃を警戒している。

だから、あの猿は離れてくれないのだ。

「とにかく、一度離れよう……えっ？」

金毛の猿は両拳に炎を纏って、殴り付けてくる。

それにより、ピシリと障壁に亀裂が入ったのだ。

「う、嘘だろ？」

結界、障壁、拘束系列は、ユーノも多少の自信がある魔法。

それを金毛の猿の怪物は、いとも容易く破壊しようとしていた。

ジュエルシードの発動で、既に以前から解(ほど)けつつあったリアルワールドとデジタルワールドの境界線は、目に見えて綻びが酷くなってきている。

それ故に、槙村動物病院から逃げ出していた猿が触れてしまい、発動したジュエルシードによってデジモンが顕れてしまう。

成長期だったデジモンと、現地の動物とジュエルシードが一体化し、デジモンとして進化。

成熟期になり、しかもジュエルシードの力で暴走してしまった。

その所為で、並の成熟期よりも金毛の猿は強力な力を獲ていたのだ。

「ま、拙い！　なのはぁ、砲撃の準備をっ！？」

「う、うん！」

レイジングハートに魔力を集中する。

桜色の環（リング）が、柄の部分に浮かび上がった。

パリン！

「障壁がっ！」

「ユーノ君、屈んで！」

「わ、判った！」

「ディバイィィィィィン・バスタァァァァーーッ！」

障壁が砕かれ、ユーノが身を屈めた瞬間にトリガーを引いてディバインバスターを放つ。

桜色の極光が金毛の猿を呑み込んだ。
爆音と共に漂う煙。
「やったぁ？」
なのはは大喜びでレイジングハートを引く。
その行動は、あまりに愚かとしか言えないモノ。
攻撃を当てただけで、倒したと確認する事も無い侭に武器を引くなど、自殺行為に等しい。
金毛の猿が爆煙を掻き分けて、その威容を顕す。
「あ……っ！？」
再び構えようとしたが、時既に遅く炎を纏う拳が2人を捉える。
「うわぁぁぁぁぁっ！」
「キャァァァァッ！」
殴り飛ばされ、気絶してしまった2人には構わずに、金毛の猿はその場を立ち去ってしまう。
倒されこそしなかったが、可成のダメージを受けた為の撤退だった。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

サッカーの練習も終わり、太一は帰路に就く。

別に部活をしている訳でもなかったが、体育などでの活躍から助っ人に駆り出されたり、練習に付き合ったりしている。

「ん？　魔力反応か？」

未だ、遠方の反応には疎い太一だったが、流石に近付く反応には気が付いた。

バッと上を見上げるてみると、金毛の猿らしき大型の生物が近付いて来る。

「デジモンッ？」

魔力反応付きのデジモン。

ならば間違いなくジュエルシード絡みだ。

しかもダメージを受けているらしい。

「誰かと戦った？　いや、それよりも……」

何故、デジヴァイスが反応しなかったのか？

魔力反応はともかく、デジモンが顕れたらある程度の距離ならアラームが鳴って教えてれる筈。

Ｄ－アカシックを見ると、アラームがＯＦＦになっている。
「ゲッ？　弄った時に間違ってアラームを切ってたのかよ！」
慌てるが、今はそれどころではない。
このままでは一般人に見付かってしまう。
否、ある程度は見られている可能性もある。
「カードスキャン！」
カードを取り出すと、太一はＤ－アカシックにスキャンした。
「デジタルフィールド！」
《ＤＩＧＩＴＡＬ　ＦＩＥＬＤ》
電子音声が鳴り響き、周囲を取り囲む様に結界が展開される。
それに伴って、建造物等がアーキテクチャ化。
設計思想段階のワイヤーフレームに姿を変える。
これにより、周囲の被害を気にせず戦う事が可能だ。
中に入れるのは、デジモンかデジヴァイスを持つ者。
魔導師では入れない。

一般人なら完全に素通りしてしまう。

出るに為は、フィールドを解除しなければならない。

「さあ、これでお前は逃げられないし、周りから見られる事も無い！　えっと、ハヌモンだっけか？」

記憶からデジモンの情報を引っ張りつつ、Ｄ－アカシックを向けてサーチする。

【Ｄｉｇｉｍｏｎ　Ａｎａｌｙｚｅｒ】
ハヌモン
属性：ワクチン種
世代：成熟期
種族：獣人型
中央アジアのネットワークで目撃された獣人型デジモン。可成、珍しい種類で“伝説のデジモン”と呼ばれている。黄金色の毛がトレードマーク。雲やケムリに乗って移動する、まるで孫悟空みたいなデジモンだ。
得意技は背中の骨を伸び縮みさせ、攻撃する【如意ボーン】と、両腕に炎を纏わせて、猛烈なパンチの嵐を繰り出す【魔猿猛爆拳】
必殺技は、金属質の体毛を更にに硬くして、豪雨のように撃ち出す【怒髪天】

「成る程……」

太一はサーチでデジモンの能力を調べると、スイッチを押して勇気のデジメンタルを選択（それしか無いが）して、大声で叫んだ。

「デジメンタル・アァァァップッ！」

《ＤＩＧＩＭＥＮＴＡＬ　ＵＰ》

「アーマー進化ぁぁっ！」

炎を彩る斑模様、角の様な刃が突き出たタマゴ型の物質がモニターから顕れて、太一を炎が包み込む。

炎が脚を、腕を、身体を覆うと、炎は意味在る形を取っていく。

その姿は嘗てのフレイドラモンを、ジャケットに変えたモノ。

「燃え上がれ勇気よ、フレイドラフォームッ！」

デジタルジャケットに身を包み、太一はハヌモンへと駆け出した。

ハヌモンが炎を腕に纏い、殴り掛かって来た為、太一もまた両拳に炎を纏う。

「ナックルファイア！」

ハヌモンの魔猿猛爆拳とぶつかり合って、その瞬間に爆発が起きる。

透かさず太一は追撃し、蹴りを叩き込んだ。

「グギャアッ！？」

顎にクリーンヒットしたからか、悲鳴を上げて倒れてしまう。
「既に、結構ボロボロだ。
誰かと戦って逃げ出したって事か？」
なら直ぐにでも決着を付けられそうだ。
起き上がったハヌモンが、腰を低くし、腕を組む。
「ガァァァァァッ！」
怒りの形相で叫ぶと、ハヌモンの金属質の金毛が針となり、太一に向かって雨霰と飛んできた。
「チッ！　ファイアァァァ・ウォォォォーールッ！」
腕を横薙に一閃し、炎の壁を作り出す。
ナックルファイアの炎の量を極端に増やし、ソレを頭の中でイメージした通りに再生成する。
これにより、太一の望んだ形へ姿を変えて新しい力と成っていた。
ハヌモンの怒髪天を防ぎ切り、太一は全身に炎を纏って突進する。
「ロケットファイアッ！」
「ガハァァァァッ！？」

炎のダイビング頭突きを受けたハヌモンは、断末魔と共に吹き飛ぶ。
倒れてピクリともしなくなり、身体の周囲にデジコードが浮かんだ。
「自らを見失いし存在よ、我が勇気の焔で浄化する。
デジコード・スキャン！」
Ｄ－アカシックのスキャナーで、デジコードをスキャンする太一。
残されたのは、デジタマとジュエルシードと子猿。
太一はデジタマと、封印されたジュエルシードをＤ－アカシックに収納、デジタルジャケットを解除して、フィールドも消す。
「この子猿って、もしかして槇原動物病院の？」
気絶しているのか、眠っている子猿を抱き抱えると、太一は取り敢えず槇原動物病院を目指して歩くのだった。
・

第１２話：希望と雷刃（後書き）

カード説明

【ＤＩＧＩＴＡＬ　ＦＩＥＬＤ】
電脳結界を張るカード。
周囲がデジタル・アーキテクチャとなり、結界を展開した者とデジヴァイスの持ち主、そしてデジモンを閉じ込める。異相をずらしており、擬似デジタルワールドとして機能する。現在の太一は気が付いてないが、此方からデバイスに干渉して、魔導師や騎士も取り込む事が可能。

今回、なのはが少しダメダメに描かれていますが、実際の劇中でも明らかに詰めが甘い場面が度々在るのでこんなものかと。

それでも何とかなってるのは、主人公補正でしょう。

次回
第１３話：後悔と決意
宜しくお願いします。

.

第１３話：後悔と決意（前書き）

遅くなり、申し訳ありません。

しかもグダグダ……

第１３話：後悔と決意

.

【海鳴総合病院】

土曜日の昼休み。

「こんにちは、幸恵さん」

「こんにちは、タケル君」

タケルは少しずれて後ろにいる少女を前に押し出す。

「彼女は、最近知り合った友達なんだ」

「あ、あの……フェイト・テスタロッサと云います」

少女……フェイトは幸恵の前で軽くお辞儀しながら、自分の名前を名乗った。

「初めまして、石田幸恵と云います。タケル君とは、親戚筋に当たるのよ」

タケルが訪れたのは海鳴総合病院で、来たのは怪我や病気ではなく人に会う為。

相手の名前は石田幸恵。

タケルにとっては、父方の親戚に当たる人物であり、海鳴総合病院で医師をしている女性だ。

「これ、お弁当です」

「ああ、いつも悪いわね」

「いえ、幸恵さんのお陰で先輩に会えましたから」

「偶然に近いけどね～」

幸恵は苦笑する。

それは偶々だった。

タケルとはある程度の交流があった幸恵は、稀に小さなタケルと食事をしたりしていたのだ。

その際、病院に同い年の子が通院している事を知る。

食事に行くのに待っていた時、見掛けたのが切っ掛けとなり、八神はやてを知ったタケルは、なし崩し的に太一の事も知った。

誤解の無い様に云うなら、飽く迄も偶然で決して幸恵が個人情報を洩らした訳では無い。

ずっと捜していた太一を見付けたタケルは、しかし会おうとはしなかった。

今はまだ、その時では無いと感じたからだ。

実際、まだ記憶が戻っていないのか、或いは力が覚醒していないのか……

観察した限り、太一には特にその様な素振りが見られなかったのが理由だった。

「いやあ、タケル君の腕も上がったねぇ」

昼時、タケルが持ってきた弁当を食べる幸恵。

「そんな事はありませんよ」

「ところで、タケル君」

「はい？」

「フェイトちゃんってさ、タケル君の彼女だったりするのかな？」

「ぶふっ！？」

タケルの傍で、タケルが作った弁当を食べるフェイトを見ながら幸恵はとんでもない事を耳打ちで訊ねる。

あまりに意外な事を言われて、普段は冷静なタケルも噴き出してしまう。

「な、何を突然……」

「だって、もしもフェイトちゃんとタケル君が結婚でもすれば、私

とも親戚になるのよ？　気になっても仕方ないでしょう」

「僕もフェイトちゃんも、まだ小学生ですよ？　気が早すぎます」

タケルが頬を紅く染めながら、幸恵に耳打ちで返すが会話が聞こえていない為、フェイトは弁当をつついて子首を傾げていた。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

【聖祥大付属小学生】

放課後……

「サッカーの試合？」

「うん、次の日曜日にウチのお父さんがコーチをしてる翠屋ＦＣと、桜台ＦＣとの試合があるの。それで、アリサちゃんとすずかちゃんも一緒に応援に行くんですけど、太一先輩も一緒にどうですか？」

なのはの誘いに、太一は右手を顎に添えて考える。

サッカーが好きな太一としては悪くない誘いだ。

ふと見れば、少し離れた所で期待の瞳をむけるすずかと、何やら電波でも送っているアリサが見える。

電波というよりは、呪詛でも送ってきそうなアリサの表情に、太一は思わず苦笑をしてしまう。

「判った。はやても一緒で良ければ応援に行くよ」

「勿論です！」

なのはは紫水晶（アメジスト）の様な瞳を輝かせて、両手を胸元で組むと太一の言葉に笑顔で頷いて、廊下で待つすずかとアリサの方へと戻っていった。

結果を伝えたのか、２人は大喜びでキャーキャーと飛び跳ねている。

その様子を優しい表情で見守り、太一は鞄を取り出して帰り支度を始めた。

日曜日、はやてを連れて来た太一はすずか達と合流して、よく見える位置に皆と座る。

試合は、翠屋ＪＦＣと桜台ＪＦＣで行われる。

因みに、翠屋ＪＦＣでコーチを務めているのはなのはの父、高町士郎だ。

「さて、応援席も埋まってきた様だし、そろそろ試合を始めますか？」

「ですな」

士郎の提案に、桜台ＪＦＣのコーチも同意して、試合が開始される事になった。

「試合開始！」

ホイッスルが高らかに鳴り響き、キックオフと共に始まる試合。

「頑張れ～っ！」

「頑張って～っ！」

「みんな～、頑張れ～！」

「頑張ってや～！」

アリサが、すずかが、なのはが、はやてが声を出して応援する。

翠屋ＪＦＣのメンバーは、可成りやる気が出た様で張り切っていた。

マネージャーらしき少女も応援しているが、キーパーが見事にシュートをキャッチした時の喜び様から、彼個人を中心に応援しているらしい。

〔これって、こっちの世界のスポーツなんだよね？〕

〔え、うん。そうだよ？　サッカーって言うの〕

淫Ｊｕ……ユーノがなのはに念話で話し掛ける。

その間にも、見事にパスを繋げてツンツンヘアの少年がシュートを放つ。

桜台のキーパーは、ボールに追い付けずゴールネットへと突き刺さ

った。

それを見て、太一は目を見開いてしまう。

「（だ、大輔……？）」

〔ボールを脚で蹴って、相手のゴールに入れたら1点で、手を使って良いのはゴールの前に居る1人だけ〕

〔へぇ？　面白そうだね〕

今度は相手側の反撃。

目付きの鋭い、髪の毛の整った少年がパスを送る。

計算され尽くしたパスを受け取ったＦＷが、翠屋側のゴールへとシュートした。

しかし、キーパーによって止められてしまう。

「（あっちは一乗寺か？）」

太一は首を傾げていた。

〔ユーノ君の世界には、こういうスポーツとかって有るの？〕

〔有るよ。僕は研究と発掘ばかりで、あんまりやってなかったけど……〕

〔にゃはは、私と一緒だ。スポーツはちょっと苦手〕

ユーノの居た世界にも当然ながらスポーツは有るが、ユーノは一族の仕事が好きで、発掘ばかりやっていたらしい。

なのはは苦笑してしまう。

試合は一進一退。

エース級が双方に居る所為で、同点のまま後半戦まで終了してしまう。

現在は1対1……

試合は延長戦にまで縺れ込んでしまった。

延長戦はサドンデス。

どちらかのチームが、先に1点を決めた時点で試合も終わる。

「ふむ……」

士郎は考え込み、顔を上げると太一の許へと歩み寄って来た。

「太一君、試合に出てみないかい？」

「は？　俺はチームメイトじゃありませんよ？」

「確か、聞いた話だとサッカーが得意だったよね？
なのは達も太一君の活躍を観てみたくないかい？」

太一への確認というより、士郎はなのはやすずか達を見て言った。

「太一兄ちゃん、私も観てみたい！」

「は、はやて？」

義妹のキラキラとした期待に満ちた瞳には、さすがの太一も少し弱い。

見れば、すずかも真っ赤になって瞳を輝かせている。

「わ、判りました……」

太一はガックリと項垂れ、答えたものだった。

ホイッスルが鳴り響いて、延長戦の開始が告げられた直後のキックオフ。

ソレを、司令塔だった目付きの鋭い少年によるオーバーラップにより、一気にボールを奪われる。

「何っ？」

「フッ、油断しましたね」

目付きの鋭い少年は、そのまま上がっていく。

「くそ！　真逆、年下に舐められるとはな！」

「大輔、ペナルティーエリアまで上がってろ！」

「は、はい！」

突然、名前を呼ばれて驚きながらも1人上がる。

太一は全力で下がり、目付きの鋭い少年からボールを奪おうと、猛烈なアタックを掛けた。

「くっ、やりますね？」

「この位なら……な！」

応えると同時に、ボールを横に蹴り上げる。

「しまっ！」

「貰ったぜ！」

味方にパスした形となり、太一は逆走した。

「チィッ！　全員、全速で戻れぇっ！」

しかし、言葉も虚しくパスが太一に通り、ドリブルでそのまま上がっていく。

「大輔ぇっ！」

1人、ペナルティーエリアまで来ていた大輔にパスが通り、大輔はパスの勢いを利用したダイレクトボレーシュートを放つ。

「征いいいいっけぇぇぇぇぇぇぇぇっ！」

パスのスピードに、大輔のシュートのスピードが上乗せされて、キーパーの手を掠めるもゴールが決まる。

「試合終了っ！　２対１で翠屋ＪＦＣの勝利！」

審判役の少年が、ホイッスルを吹くと同時に翠屋ＪＦＣの勝利を宣言。

翠屋ＪＦＣは大喜び。桜台ＪＦＣのメンバーは残念な表情になる。

士郎はメンバーを整列させて、最後の言葉を掛けた。

「お～し、みんなよく頑張った！　良いデキだったぞ練習通りだ！
特に太一君は上手く連携して、最後の勝利を導いてくれたな」

『『『『はい！』』』』

「じゃ、勝ったお祝いに飯でも食うか！」

『『『『イエ～～イッ！』』』』

こうして、翠屋ＪＦＣのメンバーとなのは達は翠屋へ移動する。

太一はオープンテラスで、なのは、すずか、アリサ、はやてと少し大きめのテーブルでケーキを食べて雑談をしていた。

其処へ大輔？　がやって来ると、太一に話し掛ける。

「太一さん！」

「あ、ああ……」

此処に来る前、士郎が名前を呼んでいたからか、彼も太一の名前を把握していたらしい。

「今日の太一さんのプレーは凄かったです！　桜台のエース、一乗寺　賢から簡単にボールを奪ってからのドリブルとパス！　俺、感動しました！」

「そ、そうか……」

姿が似ているだけなのか、それとも本人なのか？

少なくとも彼が本宮大輔で間違いないようだ。

そして、桜台ＪＦＣの彼が一乗寺　賢だという事も。

「太一兄ちゃん、サッカーは得意やもんな」

「へ？」

「ん？　どないしたん？」

突然、大輔が固まった。

「ああ、紹介しとこう。

俺の義妹の八神はやてだ」

「宜しくな？」

「は、はい……じ、ぶんは……本宮、みや、大輔でっす！」

“何故か”紅くなって変な吃り方をして話す。

太一は思った。

「（フラれるな）」

本人かどうかはともかく、ヒカリの時と同じ事になりそうだ。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

そして解散。

なのは達も各々、帰っていった。

キーパーの少年が、碧い菱形の石を手にしていた事に気が付かず……

僅かになのはは魔力波動を感じたが、気のせいだと断じてしまった。

「太一先輩は午後からどうするんですか？」

姉と街で買い物の予定を組んでいるすずかだが、太一も一緒なら嬉しいと思う。

それで聞いてみたが……

「取り敢えず、はやてを家に帰らせてからだな」
太一とて、ずっとはやてに付いている訳ではない。
とはいえ、放っておく訳にもいかない為、太一の行動は可成り制限される。
「どうせ今日もウチで夕飯食べるんだし、ウチで預かろうか？」
「え？　良いんですか？」
「構わないよ」
「私もそれでええよ？」
太一ははやてを高町家に預けて、出掛ける事にした。
先程、太一も感じていたのだ、あの魔力を。
だから捜しに行く心算だ。
「それじゃあ、ノエルに車を出して貰えるから、一緒に行きませんか？」
「サンキュー、すずか」
太一はすずかと共に街へと向かう。
車の中で、忍が助手席から太一に話し掛けてくる。

「ね、太一君？」
「はい？」
「君の持ってるアレ……」
「デジヴァイスですか？」
「そう、それ！」
忍の瞳は危ないくらい輝いている。
太一が思わず引く程に。
「デジヴァイスを研究してみたいんだけど……」
その時、行き成り地震が起きる。
「キャーッ！」
「忍お嬢様、すずかお嬢様！」
ノエルが叫ぶ。
すずかは隣の太一にしがみついていた。
外では何故か樹の根がアスファルトを破壊し、暴れている。
「（ジュエルシードが発動した？）ノエルさん、あまり動かさない

で下さい！
下手に動くと却って危険ですから！」
「判りましたが、太一様はどうなさるのですか？」
「ちょっと見てきます」
「な！　太一君、危険よ」
忍が驚くが、太一は災害の中心へと走った。
「太一先輩、どうして？」
すずかは、危険に飛び込む真似をする太一の背中を見送りながら、自らの疑問を反芻する。
太一が災厄の中心に辿り着くと、木の怪物が巨大な根を張って暴れていた。
「あれは、ウッドモン！」

【Ｄｉｇｉｍｏｎ　Ａｎａｌｙｚｅｒ】
ウッドモン
属性：ウイルス種
世代：成熟期
種族：植物型
枯れ果てた大木の姿をした植物型デジモン。普段は普通の木になりすまし、傍を通りかかるデジモンを捕まえてはエネルギーを吸収し

て生きている。また、木の根のような足で移動することも出来る。性格は至極狂暴で、怒らせると攻撃の手を休める事は無い。硬い木の幹を持つため防御力は高いが火に弱く、メラモンやバードラモンなどの火炎系デジモンが非常に苦手であり、敵対視している。必殺技は枝状の腕を伸ばして敵を突き刺し、エネルギーを吸い取ってしまう【ブランチドレイン】

「やるしかないな……！」

Ｄ－アカシックを取り出して、勇気のデジメンタルを使う。

「デジメンタル・アァァァップッ！」

《ＤＩＧＩＭＥＮＴＡＬ　ＵＰ》

「アーマー進化ぁぁっ！」

炎を彩る斑模様、角の様な刃が突き出たタマゴ型の物質がモニターから顕れて、太一を炎が包み込む。

炎が脚を、腕を、身体を覆うと、炎は意味在る形を取っていく。

その姿は嘗てのフレイドラモンを、ジャケットに変えたモノ。

「燃え上がれ勇気よ、フレイドラフォームッ！」

通常のウッドモンより遥かに巨大なのは、ジュエルシードの影響だろう。

この状態で今更、結界での隔離は意味を為さない。

速やかに倒し、レストレイションで直すしか方法を思い付かなかった。

「翠屋ＪＦＣのキーパーとマネージャー？　って事はだ、発動させたのは２人のどちらかか？」

ウッドモンのブランチドレインを避けながら、太一は近付いていく。

相手は木のデジモン。

火には弱い筈。

そう考え、一気呵成に攻め立てた。

「ナックルファイア！」

拳から放たれる火球。

『ギャァァァッ！』

効いてはいるが、いまいちダメージが低い。

「もっと強力な炎を……」

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

走っていた。

大きな魔力を感じて。

高町なのはは走って現場へ向かっていた。

ユーノと共に……

ビルの屋上に上り、赤い宝石を胸元から取り出す。

「レイジングハート、お願いっ！」

《Ｓｔａｎｄ　ｂｙ　ｒｅａｄｙ　Ｓｅｔｕｐ》

バリアジャケットを纏い、レイジングハートを手にするなのは。

「はっ！」

目の前に広がる災厄。

気が付いていたのに……

見て見ぬふりをしてしまった。

だからなのはは、沸き上がる後悔を決意に変えて災厄を見据えるのだった。

・

第１３話：後悔と決意（後書き）

ちょっとラスト、無理矢理な感じがあるかも……

椿さん、ゼクスさん、感想をありがとうございます。

次回
第１４話：出逢いの時
宜しくお願いします。

.

第１４話：出逢いの時（前書き）

・

やっと完成しました。

第１４話：出逢いの時

・

「ウォォォォッ！　ファイア・ロケットォッ！」

全身に炎を纏い、ウッドモンに目がけて頭突きを喰らわす太一。

「グオッ！」

しかし、ダメージはある程度与えた様だが、思った程では無かった。

「くっ、何故だ？　炎が弱点の筈なのに……」

ウッドモンは、木のデータから生まれたデジモン。

故に、炎には弱い。

それなのに、先程から太一が振るう必殺技はその悉くの効果が薄くて、戦果を上げてはくれなかった。

ピチャッ！

「ん？」

一歩を踏み出すと、足元が水浸しとなっている事に気が付く。

「水浸し……？　そうか、ウッドモンはあの巨大な根で地下水脈か、若しくは水道管をぶち破るかで水分を獲て、体表面に水の膜を張り巡らして炎を防いでいたんだな！？」

だとすれば、今まで太一が放った技は炎の力を半減させられていた事になる。

防御力の高いウッドモンだからこそ、弱点をカバーした最適の戦術。

そうだとすれば、残念だが太一には現状で有効な必殺技が無い。

使うなら雷だろうが、これまた残念な事に雷が使える【友情のデジメンタル】のカードが無かったのだ。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「ふむ、此処で太一さんに負けて貰っても困るんだよねぇ」

《どうするの、タケル？》

近くで太一の戦いを視ていたのは、石田タケル。

既に遠見市の自宅（マンション）に戻ったフェイトを送って行った後、魔力の暴発に気が付いた。

直ぐにフェイトの住むマンションに結界を張り、魔力の爆心地へと向かう。

フェイトに気付かれない様にした理由は、前回の戦いでタケルが与えてしまったダメージが抜け切っていなかったから。

回復魔法こそ使っていたのだが、完全に癒えたとは言い難い状態だ。
それに、タケル自身にジュエルシードへの野心は無かった。
それともう一つ、来るべき“災厄”の為にも、太一には早く覚醒して貰わないと困るのだ。
覚醒の第一段階、デジヴァイスの使用とデジメンタルとの融合。
しかし、既にタケルが行っている段階……第三段階、進化形態への移行どころか第二段階のパートナーコアの目醒めすら行われている様子が無い。
パートナーコアとは、デジヴァイスに封じられている嘗てのパートナーデジモンの電脳核（デジコア）を基にして、デジヴァイスに埋め込まれた存在。
タケルで言えば、パタモンの自我意識の事だ。
「未だ、太一さんのデジヴァイスの管制人格、アグモンが覚醒してないね」
《そうだね、アグモンの意識を感じないよ》
「しょうがないなぁ、少しだけ手助けしようかな？　お兄ちゃんからの預かり物も有るしね」
そう言ってタケルは一枚のカードをホルダーから抜き出すと、そのカードを太一の方へと投げた。

「それじゃ、頑張って下さいね？　太一さん」

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

ウッドモンの攻撃を躱し、何とか倒す手段を模索している太一だったが、突然の風斬り音に振り返る。

「あれは！？」

飛んできたカードをダイレクトキャッチした。

「カード？」

訝しんだが、それどころではなくなってしまう。

膨大な魔力反応。

「っ！　次から次へと……今度は何なんだよ？」

結構、離れたビルの屋上。

其処には莫迦らしいくらいの魔力の高まり。

桜色の極光が立ち昇って、何処かへと狙いを付けていた。

「あれは、真逆……？」

あの夜と同じ魔力波動。

「なのはか！？」

そして極太の“ソレ”は、放たれて太一すら呑み込んでしまった。

太一はあまりに突然の事に避ける事も出来ない侭に、桜色の暴力の内で沈む。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

【数分前】

「酷い……」

街が樹木に覆われ、アスファルトは裂けて家にも人にも、交通等にも被害が出ている。

「多分、人間が発動させちゃったんだ。強い想いを持った者が願いを籠めて発動させた時、ジュエルシードは一番強い力を発揮するから！」

「っ！　（やっぱり、あの時の子が持ってたんだ）」

思い出すなのは。

僅かながら漏れ出ていた筈の魔力を、なのはは確かに感知していた。

だが、最近の魔力行使で疲れていたのと、前回の敗北のショックか

ら見逃していたのだ。
気が付けていたのに……
「わたし、気付いていた筈なのに。こんな事になる前に止められたかも知れないのに……」
「……なのは」
痛ましいまでにボロボロの街並みを見て、なのはは哀しそうな瞳をしていた。
心配になったユーノが声を掛けるが突然、左手に持つレイジングハートが桜色の輝きを放つ。
「なのは？」
それに訝しむユーノ。
「ユーノ君、こういう時はどうしたら良いの？」
「へ？　ああ……」
「ユーノ君！」
「あ、ああ。封印するには接近しないと駄目だ。先ずは基となっている部分を見付けないと。でも、これだけ広い範囲に拡がっちゃうと、どうやって捜していいか」
「基を見付ければ良いんだね？」

「え？」

そう言うが早いか、なのははレイジングハートを両手に持って構える。

《Ａｒｅａ　ｓｅａｒｃｈ》

レイジングハートもなのはの意を受け、使うべき魔法を発動して電子音声を響かせた。

祈祷型である為、マスターの願いを受けて最適な選択を取捨選択をする。

桜色をした円形の魔方陣がなのはの足下に顕れ、目を閉じたなのはが魔力をプログラムへと送った。

「リリカル・マジカル……捜して、災厄の根源を！」

サーチングスフィアが街中に放たれる。

脳内に送られてくるサーチ情報。

暫らくして、光の繭に囚われた少年と少女の姿を見付ける事に成功する。

「見付けた！」

「本当？」

この時、なのはは失敗をしてしまっていた。
街に溢れるジュエルシードの魔力と焦燥感の所為で、近くに在った魔力を探知出来なかったのだ。
そして、もう一つ……
「直ぐ封印しなきゃ！」
「此処から？　魔力砲で撃ち抜く心算？」
「うん！　征くよ、レイジングハート」
《Ｃａｎｎｏｎ　ｍｏｄｅ　Ｓｅｔｕｐ》
なのはの言葉に応え、レイジングハートはカノンモードへと形状変換した。
「征って、捕まえて！」
放たれる桜色の砲撃。
なのはの失敗、それは原典であれば正解の行動だったが、デジモンと融合していた樹木は動ける。
詰まりは、敵の事を全く識らない侭に行動した事だ。
「あっ！？」
ブランチドレインがなのはを襲い、下方へとディバインバスターが

逸れた。

そして逸れたディバインバスターは、ウッドモン本体と戦闘中だった太一に命中してしまう。

なのははバリアジャケットでブランチドレインを防いだが、枝に絡み付かれてしまい身動ぎ出来なくなってしまった。

「な、なのはぁっ！」

「や、や～っ？　な、何なの～！」

身体や腕、脚に絡まる枝に絡み取られたなのは。

その姿は、未だ9歳の子供とはいえ腕を後ろ手に括られて、M字開脚をしている為にスカートの中がチラリと見えるか見えないかの境目にあって、多少エロティカルだった。

まあ、どうでも良い事だ。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

【数分後】

「う……」

まだぼやけた頭を振りながら、太一は目を覚ます。

数分とはいえ、気絶していたらしい。

「く、あの光は……なのはか？」

「キャァァァァッ！」

「あれはっ！？」

バリアジャケット姿で緊縛されたなのはが、悲鳴を上げながら巨大なウッドモンに捕まっていた。

「な、何をやってんだ？　なのはの奴……」

M字開脚させられたなのはが、涙目で必死にスカートを両手で押えている。

「仕方がないな。デジメンタルアップ！」

《ＥＲＲＯＲ》

「は？」

勇気のデジメンタルを使って進化する心算だったが、“エラー”と電子音声が鳴り響く。

「どういう事だ？　真逆、一度デジメンタルを使ったら、直ぐには使えない？」

今までは敵を倒して、再び進化をする事が無かったから気が付かなかった。

「ヤバい……」

冷や汗を流す太一。

実は本物のデジメンタルではなく、擬似デジメンタルであった為、一度使ったら一時間は使えなくなる。

従って、本来は二つ以上のデジメンタルを持っていた方がいいのだが……。

「そう言えば、さっき飛んできたカードは？」

手にしていたカードの表を見ると、それはデジメンタルカード。

「これ、友情のデジメンタルか？　どうして……」

「イヤァァァァッ！」

「って、考えている場合じゃないか。デジメンタル・アァァァァァーップ！」

カードのデータをスキャンして、太一は叫ぶ。

《ＤＩＧＩＭＥＮＴＡＬ　ＵＰ》

「アーマー進化ぁぁっ！」

雷を彩る模様、雷を象る刃の如く角、黒いタマゴ型の物質がモニターから顕れ、太一を雷が包み込んだ。

雷が脚を、腕を、身体を覆うと、雷は意味在る形を取っていく。
その姿は嘗てのライドラモンを、黒きデジタルジャケットへと変えたモノ。
「轟け友情よ、ライドラフォームッ！」
『ウゴッ？』
脅威を感じたのか、ウッドモンが太一を見る。
『ブランチドレインッ！』
幾つもの枝を太一に向けて伸ばす。
しかし枝が当たる事なく、アスファルトを貫いた。
ライドラモンは雷光の如く高速で動く瞬発力を持つ。
故に、ライドラフォームの太一は高速で動く事が可能となっており、更に……
「ブルーサンダーッ！」
『ギャァァァァッ！？』
背中の突起が輝き、蒼白い雷光が放たれてウドモンを焼く。
ただでさえ水に濡れていたウッドモンは、真っ先に雷にやられる木

のデータだ。

正しく効果覿面。

「イケるか？」

ブランチドレインを避け、ヘッドパーツに魔力を集約していく。

「ライトニング・ブレェェェェードッ！」

『Ｇａｇｇａｇｇａｇｇａｇｇａａａａａ！』

ライドラフォームの太一が使うライトニング・ブレードにより、大ダメージを受ける。

ウッドモンの身体の周りにデシコードが浮かび、動きを止めてしまう。

「自らを見失いし存在よ、我が友情の雷で浄化する。デジコード・スキャン！」

Ｄ－アカシックのスキャナーを取り出し、太一がデジコードをスキャンする。

其処には最早ウッドモンは居らず、デジタマとジュエルシードが浮かんでいた。

Ｄ－アカシックのモニターを向けると、デジタマもジュエルシードも吸収され、太一は漸く一息吐く。

「やれやれ」

あちこちがボロボロだ。

アスファルトも壁も家も、全てが見渡す限り。

太一はカードをホルダーから取り出して、Ｄ－アカシックに読み込ませる。

「カードスキャン、物体修復……ＲＥＳＴＯＲＡＴＩＯＮ！」

《ＲＥＳＴＯＲＡＴＩＯＮ》

カードの情報を読み込み、Ｄ－アカシックは根源情報にアクセス。

元々の形をアーキテクチャとして構築し、破壊された物質を使って形状を成していく。

魔力が急激に減っていき、よろける太一。

「ま、これで大丈夫か」

眩しそうに目を細め、太一は街を見やる。

そして、それを遠くから視ていたユーノとなのはは、驚愕に目を見開いていた。

自分達が緊縛されている間に、何者かが木の化け物を倒してしまい、オマケに街を修復してしまったのだ。

これでは驚くなという方が無理だろう。

「ユーノ君、一体どうなってんの？」

「さあ？」

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

その日、太一ははやてと共に月村家呼ばれていた。

高町家からは恭也となのはが呼ばれ、アリサも呼ばれて来ている。

今日はお茶会だ。

忍は本来、恭也との2人きりでのお楽しみだったが、此処には太一が居た。

「あの、何で俺は此処に呼ばれてるんでしょう？」

「あら、判らないの？」

大粒の汗を流して質問してくる太一を、忍は科垂れ掛かって流し目で見た。

「クスクス。解るよね？」

瞳の色が紅く変化する。

まるで血のような紅。
ゾクリと背筋が凍ったみたいな悪寒が迸る。
「（怖っ！）」
瞳の色が云々ではない。
その雰囲気が……だ。
太一はあの日の事を、忍に詰問を受けていた。
突然の事故……否、事件に巻き込まれたと思ったら、太一が飛び出した後に事件が解決。
太一の関わりを疑うのは、至極当然の流れだ。
「君は何かを知っている。そうよね？　太一君」
その時、太一は魔力反応をキャッチした。
「っ！　何？」
「どうした、太一？」
黙って見ていた恭也も太一の異変を感じ、その様子に慌てている。
「すみません、恭也さん、忍さん。また何かが起きたらしいです。後で必ず説明をしますから、今は黙って行かせて下さいっ！」

ただ事ではない太一の剣幕を見て、忍は吃驚しながらも首肯する。
太一は部屋を出ると、直ぐに魔力反応の在る場所へと直行した。
「太一さん？」
「3人共、なのはは？」
「太一兄ちゃん、なのはちゃんなら奥の方に行ったけど……」
アリサは目を白黒して驚いて、はやてがなのはの行き先を答える。
「判った！」
答えを聞くと、太一は速攻で走り去り後に残されたのは茫然となる3人＋α。

暫く進むと、結界が展開されていた。
太一は素人である為、結界の種類など判らない。
然し、運が良かった。
この結界は【封時結界】と云い、結界内と周囲の時間の進行を変化させる事で成り立ち、魔力の無い人間を弾く仕組みだ。
逆説的に言うなら、魔力を持っていれば突破は可能。

結界の張り手の魔力を上回っていればだが。
そして、太一の魔力はこの結界を展開した存在を上回っている。

「なのは、誰かが結界を突破してきた！」
「え？　どういう事なの、ユーノ君」
「解らないけど、早く封印をしなきゃ！」
「う、うん！」
なのはは、レイジングハートを握り締めて構えると、ソレを見た。
それは、焔に包まれた猫を思わせる緋いナニか。
原典に比べれば小さいが、それでもなのはより巨体であり、鋭い爪と牙を持つ。
「なのは！」
「え？」
突然、名前を呼ばれて振り返ると太一が居た。
「た、太一さん？　な、何で太一さんが此処に！？」
「なのは、気を付けて！　彼は結界を越えて来たんだよ、少なくと

も此方側だ」

魔法の関係者的な意味で。

ユーノが警戒を促す。

太一が何らかの形で魔法に関わっているのは知っていたが、あからさまに結界を突破してくれば警戒する。

「待て、俺は敵じゃない」

説明しようとしたら、急に金色の槍が飛んできた。

「な、何だ？」

槍を放っただろう人物が、華麗にジャンプして木の枝へと着地した。

.

第１４話：出逢いの時（後書き）

・

中々、戦闘シーンが出てこなくてちっとも進まない。

困ったもんです。

次回

第１５話：目覚めろ電脳核！　太一、決死の進化

宜しくお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9869o/

八神太一のリリカルウォー

2011年9月5日10時49分発行